

淨

土

昭和十四年五月廿日第三種郵便認可
昭和十四年七月廿日印刷本

（毎月一圓一日發行）
昭和十四年八月一日發行

第五卷 第八號

八月號

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

宇津救命丸

弱い兒ほど
可愛いのが
親心です！

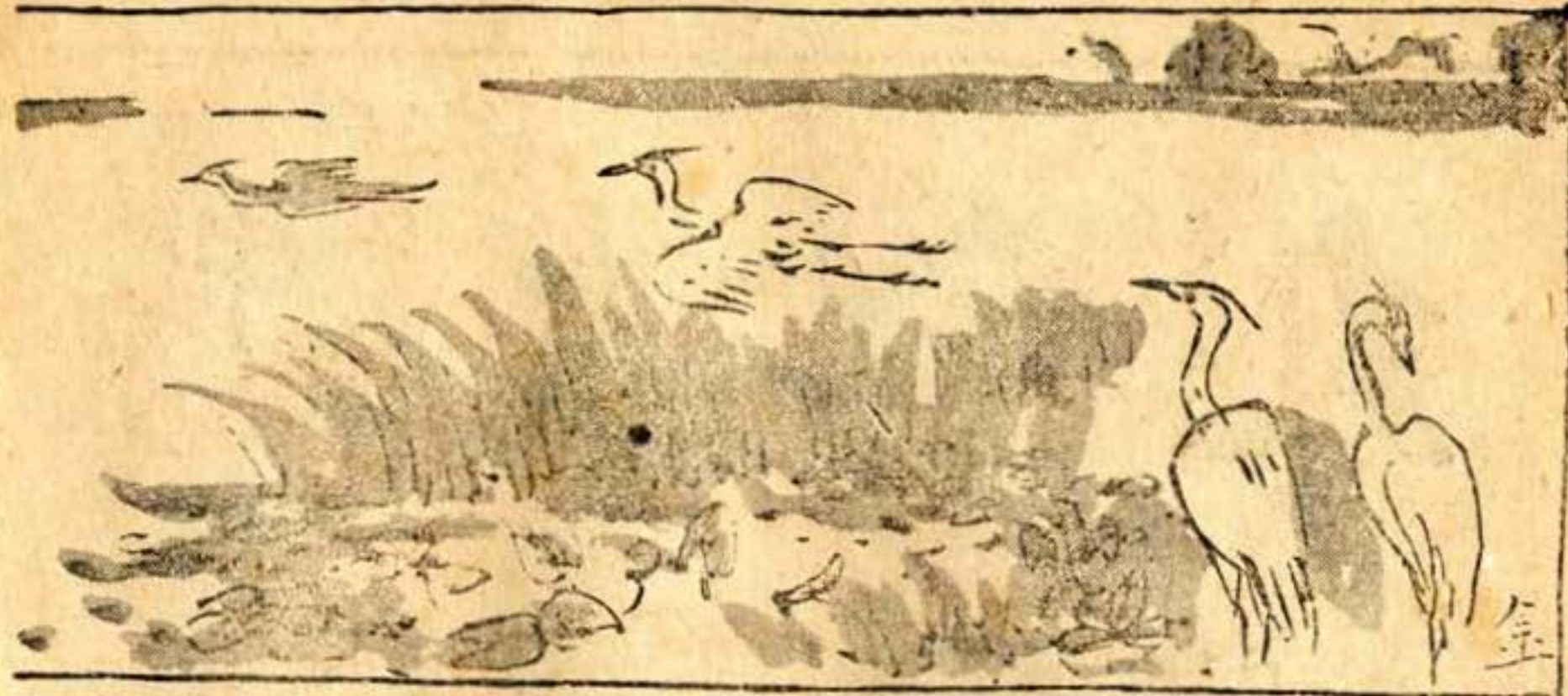
弱い兒も丈夫に
育てと祈る母の
願ひは、宇津救
命丸で美事に達
成されます！

・ 薬價二十錢より十圓まで・ 薬店にあり
今度從來の金粒が銀粒に變りました。



お腹を壊した時、熱のある時、
元氣のない時、ムズかる時、
などにスグお興へ下さい。大
變よく効きます。

店 商 置 玉 社 會 式 株 ① 販 大 ・ 京 東 店 理 代 總



◇浄土第五卷第八號八月號目次◇

表紙……………東大寺大佛殿燈籠透彫「天人散華」

扉……………齋藤清

戰跡巡禮……………大村桂巖（六）

大陸だより中支戦線とところぐ……………江藤澁英（八）

大同石佛寺に詣ず……………木村玄俊（三）

阪根翁のことと吉田勲二郎……………（三）

現地だより諸兵隊……………中野隆雄（六）

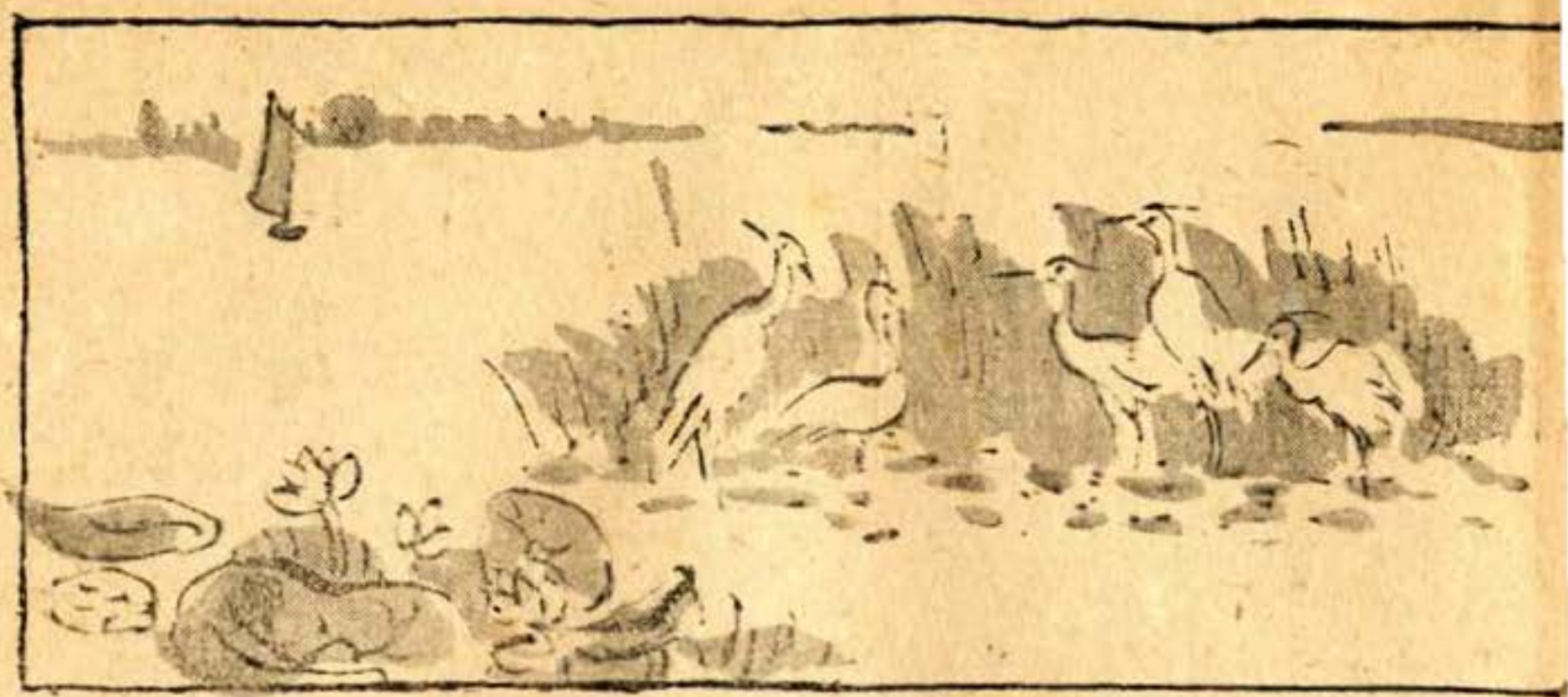
有難い佛縁……………石塚龍學（六）

信仰實話三つ……………鶴田湛泉（三）

十次郎の行衛……………安井圭虫子（四）

信仰相談……………中村辨康（五）

隨筆防人……………魚尾晃久（四）



隨筆 施餓鬼供養……………川端祐輔（五）

小篇 双生子ではなかつた話……………小林正（四）

童話 町の子……………楠あきや（六）

一枚起請文説約……………藤澤尙綱（五）

不動尊と祐天上人……………（三）

漫画おぢいちゃんが行水……………大羽比羅夫（七）

洞庭湖上の雁……………安田秀賢（五）

歌壇……………與謝野晶子（七）

俳壇……………太田耳動子（四）

日常動行式解説 佛の光に照されて……………中村辨康（五）

讀者の聲……………（四）

鑽仰運動ニュース……………（四）

編輯後記……………（空）

◇浄土 第五卷 第八號 八月號 目次◇

講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

中村
辨康著

一枚

布教用書の
最高峰

起

請

文

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何々たるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

宗教講話に新生面を開いた名講義！

定價 拾二錢
送料 共

發行所

法然上人鑽仰會

一度に十部以上
購入されば 一部當り 九錢 (送料不要)

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犧牲的奉仕をなす
寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

振替……東京八二二八七

浄土

八月號

われはたゞ
ほとけにいつかあふひくさ
こゝろのつまに
かけぬ日ぞなき

法然上人詠歌



戰跡巡禮

先頃淨土宗の僧籍に入られた牧少將（相圓）の一行と中支の皇軍戰跡の巡回回向をなしつつ、南京に山田最高指揮官を訪ねた際、參謀長から次のやうなお話を伺つた。

當時雨花台に柳川軍の表忠塔が建設されることになつてゐたが、あそこは御承知のやうに激戦のあつた處で、幾多の皇軍將士が命をおとしてゐる。表忠塔の建設地としては歴史的にもまことにふさはしい場所である。その地へ東久邇宮様が御臨行中で

「皇軍の表忠塔と共に敵軍の慰靈塔をも建てたらどうか」

と仰せられた。その時には各將軍連ははつとしたさうである。そう云ふ感情は誰れにもあつたであらうが、宮様はそれをはつきりとした形でおしめしになつたのである。流石と云つては畏れ多いが、宮様はおえらいものであると思はず頭が下り言葉が無かつたと云ふことであつた。

大體このたびの戰跡巡回回向と云ふのが、たゞに皇軍將士の英

大村 桂 巖

靈を現地に於て弔ふと云ふだけでなく、敵軍の戦死者、無辜の民衆であつて、支那人に虐殺されたものなぞをも弔ふと云ふことが目的であつた。日本軍の戦死者の靈は從軍僧や軍民の手厚い回向によつて済はれてゐるだらうが、支那人で戦死したもの、横死したものは百人が百人まで済はれておらないだらうから、そこでこれらの人々の靈をも弔ふと云ふことも目的の一つであつた。かう云ふ目的でやつたものだから、實際われ／＼が行つた先々で支那人が大變に歓迎し感謝してくれて、日本人は悪いものではない、日本人は支那人をもこの様に弔つてくれると云ふ強い印象を與へて非常な効果があつた。

且つ現地の軍の方でも我々の行動を非常によく見てくれて、種々積極的に便宜を與へてくれたので、この點からも充分に目的を達することが出来た。

このたびの行は上海、南京、杭州の三角形の間を廻つたのであ



るが、一地方五ヶ所乃至六ヶ所を墓参したとして十地方では六十ヶ所になり、しかもその一ヶ所の中に十位、多いところでは三十位墓がある。支那人のは一ヶ所に數百も數千もが埋めてあるところがあつて、墓の數から云へば平均一箇所五六十位は参つた譯である。これだけでも相當な仕事であるのに、更にその墓のあるところ、各異つた縣にあるので、その縣の知事とか各局長、社會課長、警察署長、民團長などと云ふ人達が必ず道案内はしてくれたものゝ、廣い土地のこととて、仲々見當の付かない場合が多い。そんな譯で、或る時なぞ支那の村を二三ヶ所もぐる／＼廻つてあるいてゐる中に、土地のものが珍しがつて、我々の一行にぞろ／＼つき纏つて來て、その數が百人以上にもなると云ふ有様、合僧と其の時には錫杖を自働車の中へ置いて來てしまつて、萬一場合には身を守るべきものがない、氣味の悪いことであつた。その十地方では必ず日支合同の追悼法要を行つたのであるが、大きい寺になるとその寺にゐるお坊さんだけで三百人位ゐる。事變前には五百人からゐたさうだ。實に大きなものであると云ふことが解る。

杭州の淨慈寺で追悼會をやつた時なぞ、便所へ行くのに大和尚の立派なのへ案内してくれたが、その廊下のぐる／＼と長いと部屋數の多いのに驚いたことがある。

それに支那の大寺と云ふのは大概勅願所で、日本で云へば御

朱印をもらつてゐる寺なのである。日本では維新の際に御朱印はとりあげられてしまつたが、支那ではいまだに寺の財産をとりあげると云ふやうなことはない。それだけは感心した。鎮江の金山寺の如きは揚子江沿岸から上がる葭だけで寺の坊さん全體が食べるだけの收入があるさうである。

前にも述べたやうに寺は極めて大きなものであるが、本堂は割合に小さい。丁度日本の禪宗の寺のやうな建築である。さう云ふ寺で日支合同の慰靈祭をやつたのであるが、こつちは五人しかをらないのに支那の坊さんは百人以上も出て來る。それだけの坊さんが一つ寺にゐるのだから如何にも大きいと云ふことが解る。

そしてお経は阿彌陀經、般若心經、觀音經などである。そして支那のお坊さんは皆なお念佛を唱へる。しかもそのお念佛の節が日本の御詠歌の節にそっくりなのである。だから日本の御詠歌と支那のお念佛の節をとつたのではないかと思つた位である。

加納部隊長戦死の地をも弔つたが、その時の感慨は筆舌に盡し難いものであつた。爆彈三勇士の廟行鎮から一里半、前後に護衛兵をつけて出向いたのであるが、加納部隊長が戦死なすつたその地點に來た時には一同感慨無量で牧少將も同行の平岡少將も一言も口をきかれない。兩氏とも軍人で、戰略戰術と云ふものを心得てをるから、その地に來、その地形を見て、當時の戦ひの有様が眼前に髮髯として現はれて來て一層感慨が深かつたに相異ない。



中 山 陵 に 一 行 の 記 念 撮 影

中支戦線と、ころぐ

江 藤 徹 英

「センシ」號で漢口へ

今度の中支戦蹟巡禮行はすべてが感激そのものであつた。就中、南京から漢口へ、
 豫れの目標であつただけに見聞きするもの、いづれも深い感銘が今に残つてゐる。

五月十七日の朝、南京の城内飛行場から私達は特に軍の好意に依つて〇〇機に便乗することになつた。飛行機の番號が一〇〇四番であつたが、私達は袈裟をかけて戦蹟に建てる塔婆を持つてゐたが、誰かは「センシ號に坊さんが塔婆を持つて乗るなんて變だネ」と笑つてゐたが、私達は氣にも止めずに元氣よく出發した。うす曇りではあつたが風もなく絶好の飛行日和で、〇〇機は快い爆音を立て、大揚子江に沿ふて飛翔した。黃龍が蟠つた様な長江の濁流を眼下に見下しながら、飛行は好調に續けられて一時後には豫定通り安慶に着いた。廣

い飛行場には目をさへぎるものもなく、たゞ夏草が生ひ茂つて戦ひのあつた跡とも思はれぬ靜寂さである。一人の若い將校は降るとすぐ出迎への自動車で走り去つた。再び出發とすぐ滑走が始められたが、どうしたことが離陸せず、けたましい爆音ばかりで機體は動かなくなつてしまつた。發動機の故障らしく、機關士も操縦士も同乗の將校もみんな一緒になつて、どす黒い油に汚れながら應急の修理に取りかゝつたが私達是一向手傳ひも出來ず、たゞ氣のみを焦らせて傍觀する外はなかつた、かくて一時間餘りは過ぎたが修理はならず、漢口方面

は悪天候だとの通報があり、この附近も全く安全といふ譯ではなく、私達は南京へ引き戻すやうにとのことである。何だか出発の際の誰かの言が當つたやうで苦笑を禁じ得なかつた。それから午後四時頃南京から別に〇〇機の救援を求めて、夕刻南京へ引き戻したのであつた。

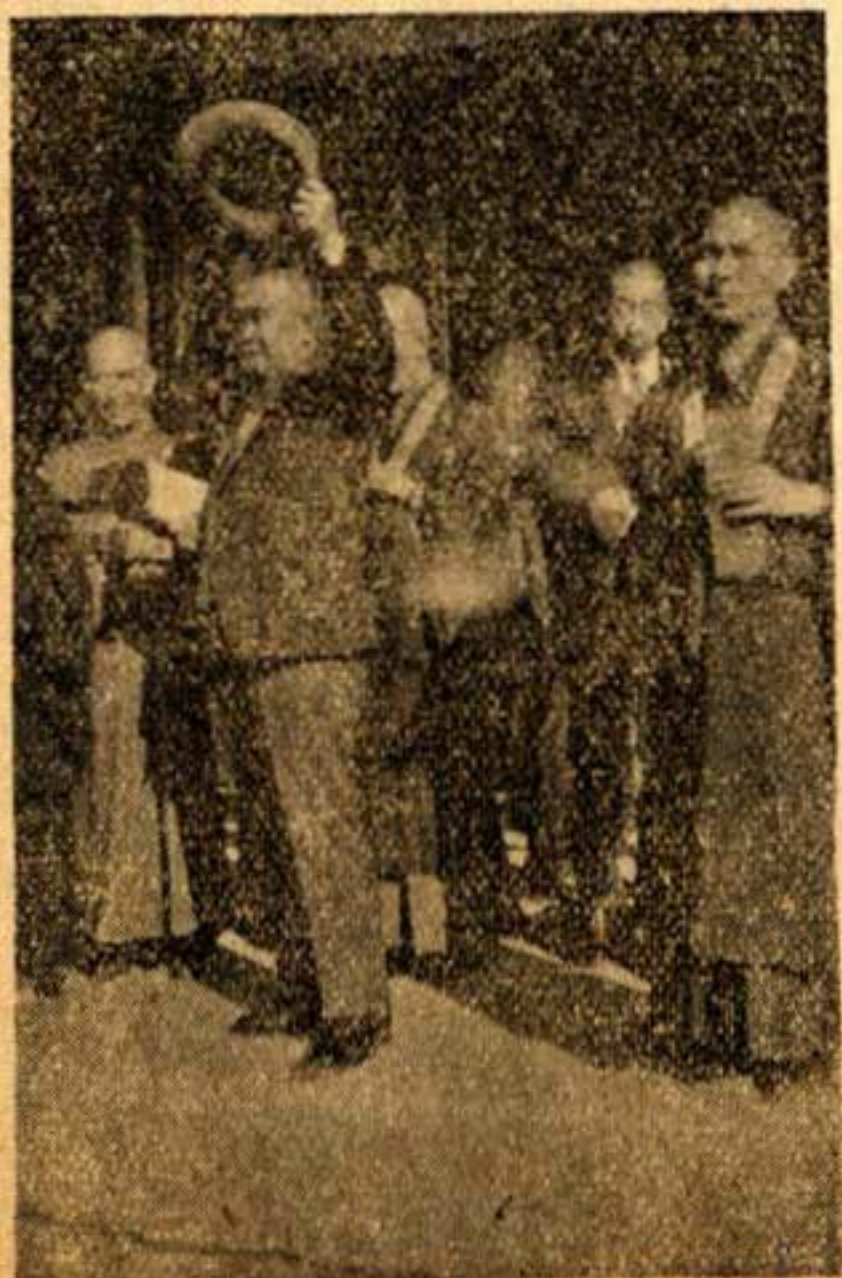
安慶で會つた兵隊さん

南京から漢口へ、一時間五十分といふので辨當も持たず、水筒もかけずに身一つで飛び乗つた私も、途中機體の故障で安慶の飛行場に放り出された時、初めの間はどうかならうと高をくゝつてゐたが、一時間、二時間と血なまぐさい戦場で佇立してゐる。雨さへ催して来る。廣い飛行場の遙か彼方の一隅に小天幕が張られた哨舎が一つ見えるばかりである。その方に歩を運んだ時、一臺の自動車がどこからか場内に入つて来て、私達の傍に止まつた。運轉臺か

ら降立つた一人の兵隊さん、腕章には〇〇野戦郵便局と記してある。逞ましい筋骨ではあるが優しいさうな兵隊さんである。草原に腰を下して色々と話し込む。キビ／＼した江戸つ子氣質で出征以來の戦場談を聞かされる。そうしてこの兵隊さん時々胸の邊りに手を當てゝはニツコリと微笑むのである。どうしたのですと聞くと「坊やが一緒でしてネ」と云ふ。最近奥さんから「こんな坊やが大きくなりました」と送つて来たといふ。愛兒の寫眞をヒツシと懷中深く抱きしめてゐるのである。凛々しい勇士のこのまた儼に床しい姿が、私には何とも云ふことの出来ぬ尊い姿として感銘された。奥さんに御傳言でもありませんかと云つたら、住

所を記した紙片を渡されて、元氣で御奉公してゐると傳へて下さいとのことであつた。私は東京へかへると、すぐ手紙で戦場で會つた夫君の姿を書き記して送つた。するとまたすぐ奥さんからは次のやうな禮狀が来た。まだお目にはかゝつてゐぬが、奥さんなる方のやさしい心根が偲ばれる。

(前略) 過日は御用務多忙なる御身に
もかゝはりませずわざ／＼御手紙下さ
れまして厚く御禮申上げます。



杭州にて、——帽をかざすのが筆者

良人中村こと無事にて軍務にはげみ居る由何よりとあんど申しました、良人出征いたしましてよりはや一ヶ年ほど丸々と過ぎてしまひました、わづかな短かい一ヶ年でしたがいろ／＼な起伏がございましたが、唯々これもお國のためと淋しい時も悲しい時もいつもみ佛におすがりしております。私もとても小さい時から、母からみ佛のあり

がたさをよく教へられてゐますのでほんとうにどんなにか心づよく、如何なる事があつても何か知らぬ目に見えぬ力づよさがございます。

武運つよく、歸還もいつの日かすることもございましたら是非一度御貴殿の御許へ中村と共に参り拜眉を得たいと樂しみおります、及ばず乍らすべてを捧げて御國のために今後共一生懸命に留守を守ります（下略）

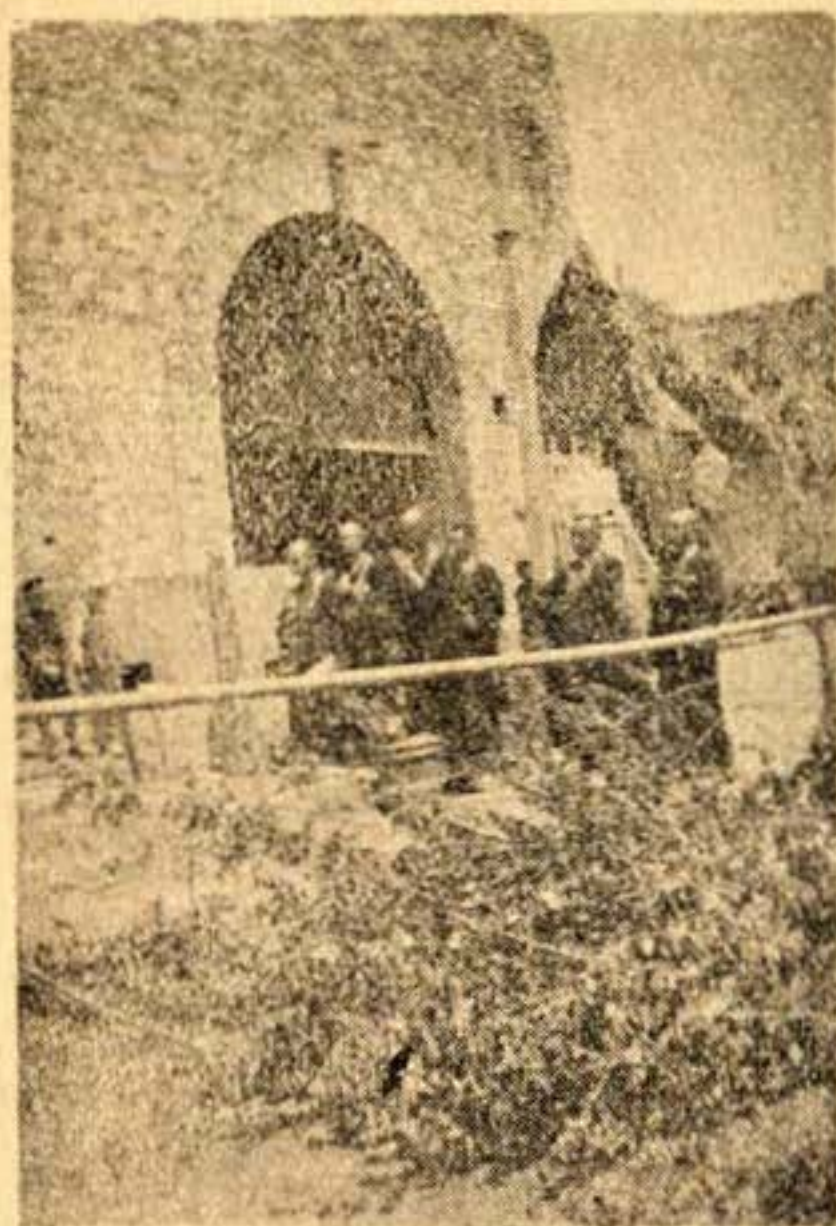
（出征者中村兵藏妻

安子）

〇〇船中の白衣の天使たち

安慶から南京に引かへした私達は翌十八日、特別の便宜を得て御用船〇〇丸に便乗して、南京の下關から揚子江を溯ることにな

つた。船は盤工船だつたといふ頑丈な黒々とした六〇〇噸級の大船、病院船として江上勤務に久しく従事してゐるもの。前線に配屬せられる六十名ばかりの見習士官たちや、前線へ歸りゆく兵隊たちと一所に乘船した。私達は特に將校待遇をうけたがそれでも毛布一枚もなく、枕一つもなく、みんな着のみ着のまゝでのゴロ寝である。船艙は蒸す様な暑さである。甲板に出ても頭の芯までが痛い様な暑さである。船を溶したやうな濁流を押しわけて船は溯江してゆく、南京から漢口まで五日の日數を要するといふ、明けても暮れても濁流と單調な沿岸の風光、たゞ岸の彼方此方に立つ鐵兜の哨兵を見ると目頭があつくなつて来る。給養も粗末で麥飯に千切大根の一角で毎日同じものばかりで、若い見習士官達は「俺れは無妻だが武勳を輝かして歸還して結婚の時は、先づ第一に相手の女が千切大根が好きか嫌ひかを聞合すぞ、若し千切大



中山門外にて回向する一行

根が好きだつたらどんな美人でもご免だ！
千切大根は一生喰ひ飽いたぞ」と笑談を云ふ有様だつた。

勿體ない事であるが、〇〇船中の五日間は決して安樂ではなかつた。

しかし私はこの船中で實に尊い光景に接することが出来た。それはこの船の〇〇部隊に屬してゐる日本赤十字看護婦の〇〇班と〇〇班の四十九名の白衣の天使達である。いまこの船で漢口まで傷病兵を收容に出かけるのである。

聞けば事變勃發以來召集に應じて病院船勤務になつた人達である。長い人は二年、短かい人でも一年半、ずつと船上勤務でまだ一度も内地の土地は踏んでおらぬといふ、この不自由な船内で、不十分な給養で、天使達は黙々としてその任務に服してゐる。

朝まだき五時には甲板上に整列して東方を遙拜、一齊にラヂオ體操を、愛國行進歌

を高らかに齊唱、すべてが軍隊同様に規律整然と行動してゐる。

婦長の一人など七人の子福者で長男は本年が徴兵適齡だとのこと、ある人は五人とか四人とか子持ちの人も多い、しかし愛兒を母に托し、夫に任せて命令一下天使達は馳せ參じて汝々として勤務に張してゐる。誰一人不平を洩すものもなく、不満を訴へる方もない。君國のために傷つき、病に罹れる勇士達を吾等の手に依てと、雄々しい心で看護に、輸送に當つてゐるのである。

彼女達は云ふ「江上勤務は樂ですが、海南島方面での海上勤務の時は大變でした、船酔してみんな洗面器を片手に、片手を白衣の勇士達のベツトにつかまり乍ら、自分の苦しみは忘れて、五人六人の患者のお世話に實際大變でした」と、

私達は熱いとか、食物がまづいとか、疊が痛いとか、不平と不満のあるだけを並べ

てゐる時彼女達は黙々として清々しい白衣に身を持して、それぞれの任務に精進してゐるのである。その尊い姿、その神々しい姿、誰が男だ、女だと大丈夫に區別が出来やう。勇士達の彈丸雨飛の中に奮闘するそれにも比して、白衣の天使達の聖業に低頭合掌せしめられる。

幹部候補生から見習士官になつた、大學や専門學校を卒えた立派な若人達の勇ましい勇者の姿を見るにつけ、優しくも雄々しい白衣の天使達の活躍振りを見るにつけ、實に國家總力戰なるかなと、獨り肯かれて自己の心身に鞭つのであつた。

x

x

x



阪根翁のこゝと (一)

吉田 絃二郎

わたくしの妻が亡くなつた時お越し下さつたのは増上寺の大島法主であらせられた。それからおそれ多いことと思つてゐるが、その後も毎月のやうに玉川の茅屋をお訪ね下さつては御回向をたまはつてゐる。冥加に餘ることである。

そのをり／＼に御前さまから承つたお話を何かに書きつけて置いたらと思ふこともあつたが、そのまゝにして今日に至つた。

今月からいろいろ伺つたお話の中主として阪根彌兵衛翁に關するものをしばらく書き記して置きたいと思ふ。

阪根翁のことについてはすでに本誌上に數回、清譽上人御自身がお述べになつてゐることであり、讀者の方々は御記憶になつてゐるであらうが、阪根翁のやうな立派

なお方についての話は幾度聴いても尊いものであり、また幾度くりかへされてもありがたいものであるから、話の中にはずゐぶん重複するものもあるが、その邊のことは前以ておゆるしを願ひたい。

一向専修の生涯

二三日前の夜はひどい雨であり、雷鳴さへ伴うてゐた。御前さまは簾端ちかい大樺の枝を傳うて落つる雨しぶきもお氣付きなさらぬやうな様子で關通上人のことをお話なされた。

阪根翁は關通上人とは信仰的にも深いかゝはりを持つてをられたさうであるから、先づ關通上人のお話から記すことにする。

關通上人は尾州海西郡大成郷の人である。六歳のころから精舎に遊び、砂を掻き集めては塔を作り、佛を拜む眞似をしてをられたさうである。年十六のをり江戸に出かけて行かれた。そのころの名は元教といつてゐた。時は寶永年間のことである。江戸では三縁山に留寓すると十三年、孜孜として一日のごとく學問修業をはげみ、當時すでに「論席名を擅にす」と記されてゐる。

上人は享保八年尾州に歸ることになつたが、このをりのことである。次のやうな逸話が残つてゐる。

上人は十三年の間修業を積まれたが、しかし江戸の學問は上人に何の光りをもあたへてはくれなかつた。上人は満たされぬ心を抱いて江戸を立ち、やがて箱根の關所にかゝられた。

箱根の關所は天下第一の嚴しい關門である。上人も恐らく嚴しい詮索を受けられたことであらう。

ところが恰度その時、上人のかたはらを、何の詮索をも受くることなく易々と關所を通り抜けてゆく二人の男があつた。見ると裸一貫の駕籠昇き人足であつた。

二人の雲助は關所の在ることさへ意識してゐないとい

つた風に、やす／＼と天下第一の嚴しい箱根の關門を通り抜けて行つた。

上人は豁然として悟つた。

「自分たちはやれ學問だの、やれ法衣だの、やれ荷物だのと、いろいろなものを身につけてゐるから、なか／＼關所を通り難いのだ。一切を捨てろ。裸一貫になれ。一切を忘れて念佛を申せ。」

この時から上人は自分の名も關通とかへられた。

やがて京に上つた關通上人は華頂山に法然上人の廟を拜し、飄然として畿内南海の諸州を遍歴し、二六時中念佛精進、ほとんど眠ることもないといふ有様であつた。

したがつて上人には寢所といふものもなく、夜も晝も念佛をつゞけられた。すなはち「彈三斤一念義邪見。褒三揭多念義正宗。」と高僧傳にあるのはこの間の消息をつたへたものであらう。上人は明和七年二月二日端坐念佛往生の素懷を遂げてをられる。

さてこの關通上人の信仰を、信念をそのまゝにして一向専修の八十年の生涯を生き貫いた人が阪根翁であつた。その生涯の精進はまことに僧侶たちも及ばぬ程のも

のであり、いろいろな阪根翁の美德の中、その一つでも學んで實行ができればまことにありがたいことである。

時計がはりの翁

西洋哲學史を讀んだ人たちは屹度獨逸の大哲人カントが時間を正しく守つて生き貫いたことを知つてゐるであらう。

かれは三十幾年間、毎朝ランベといふ兵隊上りの從僕に五時五分前に聲をかけさして、必ず起きた。

カントにはグリーンといふ友人があつた。この男はカント以上に、時間といふものに几帳面な男であつた。或る時グリーンは「明朝八時に馬車の散歩をしよう」とカントと約束をした。翌朝になるとグリーンは七時四十五分に時計を手にして部屋の中を歩きまはり、五十分に帽子をかむり、五十五分にステッキを握り、八時の第一鐘が鳴るとともに扉を排して馬車に乗つた。カントは二分遅れたので、たうとう馬車に乗ることはできなかつたといふ話が残つてゐる。

カントは必ず午後の七時には散歩に出かけた。だから

街の人たちは「まだ七時にはならないよ、カント先生がお通りにならないから」と言つたといふ話は有名である。

ところが阪根翁にもこれによく似た話がある。阪根翁は毎朝奉公人たちが眠つてゐる間に、そつと起きて水垢離を取り、まだ薄暗い道を歩いて知恩院、清水と他に一ヶ所のお詣りをすまして歸つて来る。翁が朝の參詣をすまして歸つて来るころ、町の人々はやつと雨戸を明けてゐるといふ有様であつた。しかも翁は毎朝一分と時間をたがへない。だから、翁のお詣りの姿を見かけた街の人たちは、自分の家の柱時計をながめては「今朝は家の時計は五分遅れてゐる。今阪根さんがお通りだもの」などと言つた。

カントは毎朝、從僕に呼び起されて、起きた。阪根翁は疲れた從僕たちをそつと寢かして置いて自分ひとりでお詣りに出かけて行つた。

同じ正確な時間であるが、時間の内容が全然ちがつてゐる。

阪根翁は奉公人たちよりも遅く寢て、しかも奉公人たちよりもすつと早く起きた。たいてい毎夜三時間くらゐ

しか寝なかつた。

ナポレオンが三時間か、四時間しか寝なかつたといふ説も有名であるが、そのナポレオンは比較的若くて死んだ。阪根翁はあんまり丈夫な人でもなかつたが、必ず一日に三萬遍のお念佛を唱へて夜は三時間だけ眠つて八十年の長壽を恵まれた。考へさせられるものがある。

翁は八十の老年に達しても朝ごりの参詣には必ず歩いて行かれた。晩年にはあまり家の人たちが心配をするので、雨の時など歸路には俤に乗ることもあつたが、往きには絶対に車を用ひかなつた。こゝにもゆかしい心がけが偲ばれる。

陰徳といふこと

物を大切にすると、一滴の水も粗末にせぬといふことも陰徳である。道元禪師は谷川の流れを干杓に掬んで飲まれた。そしてその干杓に残つた水をふたゝび大切に谷川の流れにおもどしなされたといふことである。

このころ或る外國人がわたくしを訪ねて來た。わたくしは日本に來て何を一番つよく感じたかと問うて見た。

「日本の人たちはたいへん水を粗末にする。ホテルに泊つても水道のコックからは絶えず水が流れてゐた。もつたないないことである」と外國人は答へた。まことに頂門の一針である。

阪根翁は食事にしろ、衣服にしろ實に質素をきはめたものであつた。澤庵や漬物などは奉公人たちが切つて棄てるその切れつばしを大切に殘して、それを自分で喰べてをられた。翁は薪一本炭のかけら一つも無駄にはしなかつた。奉公人たちの間には最初は翁の眞意を解し兼ねるものがあつて、翁の教戒を口やかましいくらゐに考へてゐたが半月と経たぬ中に、すっかり翁の徳に感化されてしまつた。いつも十四五人もゐた奉公人の中で、かつて一度だつて翁の蔭口をきいたものもなかつた。よくよく徳のある人でなければできないことである。一杯の水をも粗末にしないといふ心、澤庵のしつぽ一つ粗末にしないといふ心はまた着物の上にもあらはれて翁は自分の質素な着物を或る程度まで着古せばそれを洗ひ直して貧困な人達に恵んでやり、最後まで一枚の着物も無駄にしないやうにしてをられた。(つゞく)



諸と兵隊

—— 從軍僧の手記 ——

中野隆雄

今日もまた行軍だ。毎日々々進撃に行進に、落付いて食事など取つたことがない。歩きながら畑の露をとつて、泥だらけのまゝ、土を拂ひ落して囃るのだ。私も戦地に來て、生の露を囃ることを知つた。實に好味だ、勿論腹も減つてはゐるけれど。

食糧の不足と行軍とで、誰れもが疲れきつてゐるので、自分ながら今日までよく歩き続けられて來たものだと思ひに思はれる。

足は痛くなる、腹は減る。自分の力では最早歩くことも出来ない。しかし皆な歩いてゐる。重い装具や武器を擔いで前進してゐる。

黄塵の道を、又或る日は泥濘の道を、不平も云はず、お互ひに戦友を助け、囃まし、細い田畦道を、山の狭路を前進するのだ。そこには貧富の差別もなく、怨恨もなく一切のものが目的に向つて、前進してゐる。もしこの世に神佛の力があるなら、われわれは見えないこの強い力に引きづられて前進してゐるのだと云へやう。誰れもがこれが自分の力と思ふものは一人もゐない。

丁度粵漢線遮断の目的に向つて前進して五日目だ。陽新鐵道を落してから敵は全面的退却をしたらしい。今日まで一人の敵兵にも出遭

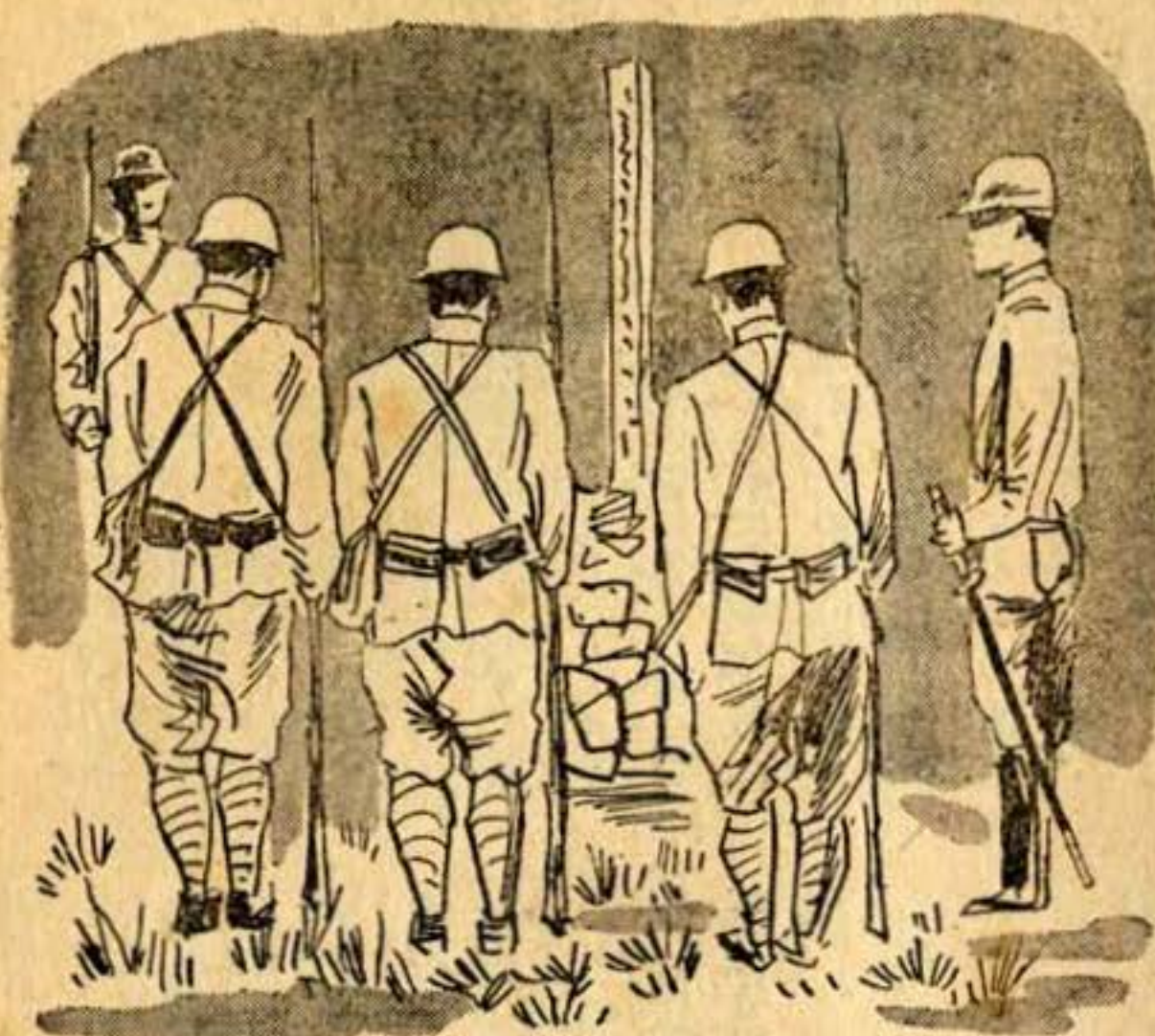
二河白道之歌

大陸戰線に在る華人軍に對する

井上淡星

一
すがりまゐらす御佛は
わが今あふぐ彩雲の
かなたに在すとあせりつつ
ふと右手見れば火の河の
火は炎々と左手には
波ぞ瀧つ瀧水の河。

二
心も空に打見れば
眞白き道は一すぢの
絲より細く西を指す
焰は道を焦がしつつ
瀧つ瀧道を流しつつ



はない。夜に日をついでの追撃行軍だ。

所々に敵の放棄したトーチカがある。道脇の支那家屋には退却の途中、傷付き、或ひは病魔にやられた支那兵が死んだまゝ遺棄されてゐる。疲れた足を引つづて肩の重い銃をつり上げながら、畦道を來た時だ。前方にあた

つて、ボン／＼と銃聲が聞えた。

兵士は一勢に「やつたア／＼」と顔を見合せてニツコリと笑つた。戦闘が始まれば行軍は中止だからだ。行軍より戦闘の方が皆んなよろこぶ。

本部は前進中止、戦闘準備に入つた。皆な元氣が出た。——然しそれもつかの間、前方の銃聲はもう止んだ。こんどは進撃が猛烈だ。又重い足を引きづつて前進にうつた。

一人の兵が突然

「おい、貴様その諸どうしたんだ？」

「今、捌つたんだよ。腹が減つては戦は出來ぬ。」

「こいつツ！ 俺に一つよこせ」
彼は泥だらけの諸をまた一つポケットから出して隣の兵に渡した。二人は無言で顔を見合せ、ニツコリ笑つて、それを噛

をののくわれをわれと泣く。

三

いのちよ寧ろ絶え果てよのぞみも失せしわが耳を牙を劍と磨ぎ澄まし後にせまる蛇けものその咆え哮ける中にしてかしこきおほせ強く撃つ——

四

「汝が往く道はその白きただ一すぢのほかあらじためらふなかれ直進め」更に御聲は西の方『然なり其の道とく來れ』われここに於て待つ久遠し』

五

すめらが軍つるぎ持て兇者こらす昨日今日帝のさとし疑はで順ふ中華の民草に見よ往昔の善導の尊き教訓今生くる。

り／＼前進してゐる。

昨夜の村落露営に附近の畑から諸を澤山掘つて、食糧の代用として焼いて背囊やポケットに入れて來たのだが、みんな喰べてしまつた。泥だらけの生諸が唯一の食料だ。私達の部隊の戦場地、この江南には諸畑が多いので本當に幸せだ。一寸の休みにも諸を掘り、敵に見えぬやうに、焼いたりふかしたりして次の食糧を作る。敵は進撃の爲に色々な器具を捨て、逃げてゐるが、その中に食糧の入つた桶や籠が捨てられてゐる。その中には矢張り諸が入つてゐる。激戦のあつた跡の敵の死體と見れば、ふかした諸を掘つてゐるのもある。ポケットから顔を出してゐるものもある。敵も味方も諸で元氣をつけ、諸で戦つてゐたのだ。一兵士が

「こんなに諸が食へるなら、女でも連れて來たらよろこぶだらうなア」と云つて笑つた。

十月二十七日午後五時三十分、岡崎部隊は

遂に目的の粵漢線に突入、これを完全に遮断した。わたし達は長い進撃に疲れ切つてゐた。然しその時だけは疲勞もなにもない。みな泣いた、よろこんだ、そして、豆のできた、痛みきつた足で武漢の咽喉、粵漢鐵道の線路を踏み、蹴る。そして天も裂けよ地もくだけよと萬歳を叫んだのであつた。

いつまでも／＼、陽が長い陰をひいて西に入つた後でも、誰も立去らうとはしなかつた。長い苦勞もみんなこのためだつたのだ。苦しみのあとの喜び、このよろこびを得るためだつたのだ。誰れの眼にも光つたものが流れてゐた。

私は追撃の途中の戦場で戦死した戦友の火葬を執行しなければならぬ。十名ばかりの兵隊とその準備をし、茶毘にふして讀經した。今粵漢線を遮断した感激を一緒に出來ず、その目前で瘞れた戦友のため、少しでもこの感激を分けて共によろこび度いと、みな廻りに集つて來た。

そして私に誦經して、念佛の聲はいつまで

も／＼絶えなかつた。

一人の兵が

「こいつは瘞れた時、生諸がポケットに入つてゐたんだ。粵漢線を遮断したら焼いて喰はふとでも思つてゐたのだらう。可哀そうに――」

と焼きたての諸を供へるのだつた。火葬の場所に墓標を立て、血闘い戦場に無心に咲いてゐる野花を取つて供へたあとへ、何時の間にか生諸や、黒焼けの諸や、ふかしたのが山のやうに供へられた。

附近の田畑のかげにある支那軍の戦死者の所にも諸が供へられてゐる。夜になつて兵隊達が

「支那兵は敵だからいも／＼しいが、死んだ奴には罪はないから、諸を供へてやつたよ」と笑つてゐた。

(筆者は淨土宗僧侶、目下北支の第一線に従軍僧中の最古参として活躍してゐる。)

齋藤清畫



御佛に捧げむものと白百合を狭霧の中に切れば涼しき

福岡縣 佐藤伸宏

評一讀、清涼の感のする歌である。作者のこの心も水晶のやうに玲瓏と美しく透きとほつてゐたにちがひない氣がする。

友らみな寄せ書き給ふみなさけに血もて答へんますらをわれは

大阪市 渡邊明道

評一讀、清涼の感のする歌である。作者のこの心も水晶のやうに玲瓏と美しく透きとほつてゐたにちがひない氣がする。

郷土部隊の寫眞出たりと田にをれば老母は新聞を振り／＼馳せ來も

(兄出征)

評一讀、出征した息子の元氣な姿が新聞に出てゐたとて老母は大喜び、田に働いてゐる弟にも早く見せようとして一散走りしかる大きな聲で先づれたしながら行くところ、微笑の湧く人情の温い作品である。

貧しけど餓ゑに至らでつつましく念佛申せる身の嬉しけれ

小樽市 平井善念

天主閣明けのみ空にそびえたつ蓮の花さくほりに巻かれて

和歌山縣 松尾景道

評一讀、清涼の感のする歌である。作者のこの心も水晶のやうに玲瓏と美しく透きとほつてゐたにちがひない氣がする。

戦ひに破れし兒らのあはれさ上搜せしからだに飯乞ふ見れば

京都府 野智善

憂きことも食しき我れも忘れつゝ歌よむ時の樂しかりけり

小樽市 中村もん

何故の涙か知らずななかまど花咲く頃となりけるかも

靜岡縣 澤田岳潤

うつし世に母そはありと思ふさへはかなき程にわれ老いにけり

北海道 寺田嶺山

此のたびの先手はいたく身に沁みて南無といふより外なかりけり

萩の友に別れて

ありがたや大みことのりをふしおがみけふの奉仕にわれ出でて來ぬ

北海道 花田顯住

御佛へすがる心のまこととて、われはつくさん皇國のために

東京市 三野輪幸郎

聖戰の一人息子へ老いし母親忘れよと書きて送りぬ

東京市 小泉妙春

心より心に傳ふ師の君の教の道をふみてまよはず

小樽市 中村茂舞

風ぎ渡る磯の藻草に夏陽さし夕映あかき蘭島

大阪府 鹿原桂藏

ありがたや一度申さば又一度つづきて出づる御佛の御名

名古屋市中村區 山田隆太郎

山寺に落葉あつめて栗焼けば渡鳥飛ぶ影のしづけし

千葉縣 高橋美矢子

山峽の温泉の今宵涼しかり河鹿鳴く音に夜は更けにつつ

大阪府 坂田善昭

奮戦の勇士も夜はいねがてに思ひ出づらん故郷の母

横濱市 渡邊ユリ

白雲を美しく焼き街を染め赤く大なる日輪の落つ

横須賀海軍病院 身島雲

故郷に病める身となり筆とれば今日しも立ちぬ窓の夏霧

石川縣 有側芳子

病み入れば母の情のしのばれて涙ぞにじむ夜半の灯

栃木縣 大輪清

眞性のみ名のみとなへ朝々に世のいとなみに心明るし

小倉市 益田光

大きな人の去にます夏上矢吹博士小野先生と合はするこの掌

秋田市 小崎龍葉

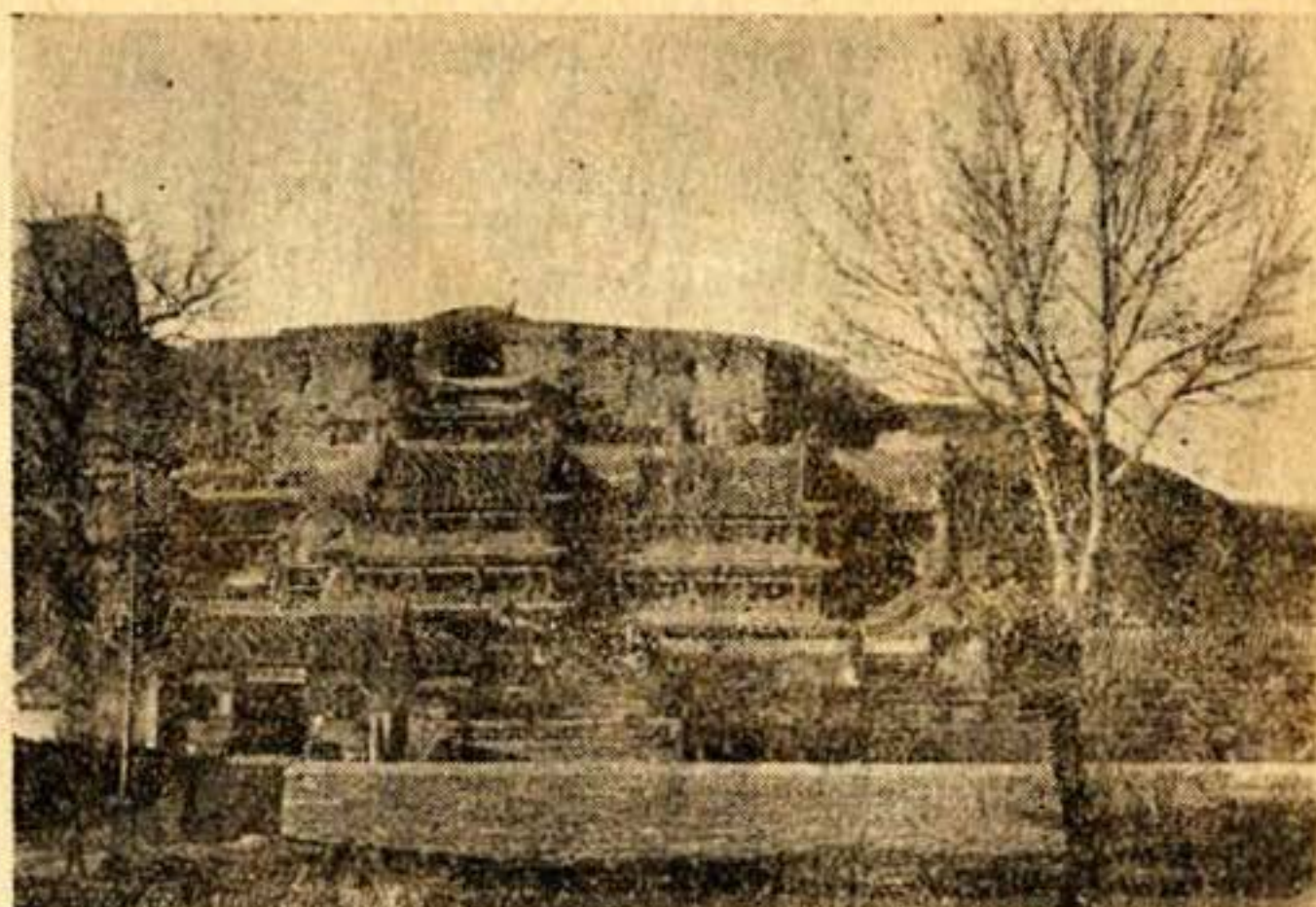
疾く起きてわが詣づるは久遠に御魂祭れる護國の社

和歌山縣 伊藤天雄

夜學より雨ふる町を歸る時心わびしく母を思へり

投稿規定

官製はがきに一回二首以内とし、「淨土」編輯部歌壇係あて送ること。



石佛寺全景

大同石佛寺に詣つ

木村 玄 俊

した。

私は先頃浄土宗の命を受け、一行十一名と約一ヶ月に亘り、北支那各地の皇軍慰問、戦跡巡拜、英霊回向の序、豫て聞き及んだ山西省大同の近き雲崗大石窟に古い佛教信仰の結晶、世界的に有名な佛教大藝術の石佛に参詣

大同は山西省の北部で大原に次ぐ大都會で、北京を去る西北約百里の地點、京包線(北京—包頭)に乘車して西北に走ること十二時間、沿線南口の激戦地に忠勇果敢なりし皇軍將士の戦功と勞苦を偲び、八達嶺、居庸關の險を越えて有名な萬里の長城を車窓に眺め、その規模の大なるに瞠目し、悠久四千年長い支那歴史を懷古しつゝ、張家口を経て此地に着く、今は蒙疆地域、晋北自治政府の所在地として知らる、古い漢時代には平城と稱せられたが北魏の拓跋珪が都をこゝに置いてから、後魏の孝文帝が洛陽に都を遷すまで約百年近くも首都であつたそうだ。その

後武周と稱し、北周の時代には雲中、隋朝には雲内、唐の時代になつて又雲中と改稱されたと云ふ。蒙古に近いのでその來襲に備へるため古來よりも軍事上重要な位置であつたばかりでなく、又交通の分岐する要地でもある。さて雲崗の大石窟はこの大同の西郊にあたり、こゝの西門から約五里、砂漠のやうな丘陵、暑熱下砂塵の捲き上る高原の惡路をバスにひどく揺られて約一時間程でつく。雲崗の山はさして高くない、低い武周川の溪谷をなす所と、その北岸高さ約百尺位の斷崖、砂岩の水平層で東西約二十軒に亘つて開鑿されてゐる。大石窟は約二十程でその内外に大小幾千萬

體の石佛、佛龕が山腹壁面をうづめてゐる、莊嚴偉觀は實に佛教の大藝術である。

この石窟は北魏の文成帝の時、僧曇曜の奏請に依つて創建せられ、最初は大佛像五窟を造り、その後引續き開鑿せられて遂に壯大な一大聖境を築き上ぐるに至つたものだといふ。

抑も北魏の太武帝は熱心な道教信者であつたが偶々當時の大臣崔浩も極端な佛教嫌であつたので、帝に勸めて廢佛令を布かせ、各所にある寺院佛塔や佛像を毀させ御經類を燒かせ多くの僧侶を止めさせ甚だしきは抗殺までして遂に一切の佛教の姿は北魏から消えてしまつたが、之が爲め影響するところ大きく荒み行く人心の動きの著しき結果を見るに至つたのである、然るに太武帝が崩じてその孫文成帝興安元年（皇紀一一二二年）に即位されたが廢佛毀經の社會的惡影響に鑑み、直ちに佛教復興の語を發せられ、僧侶の曇曜を召され師の禮を以て優遇せらるゝやうになつた。法師は佛教復興の時機到來せるを喜び、

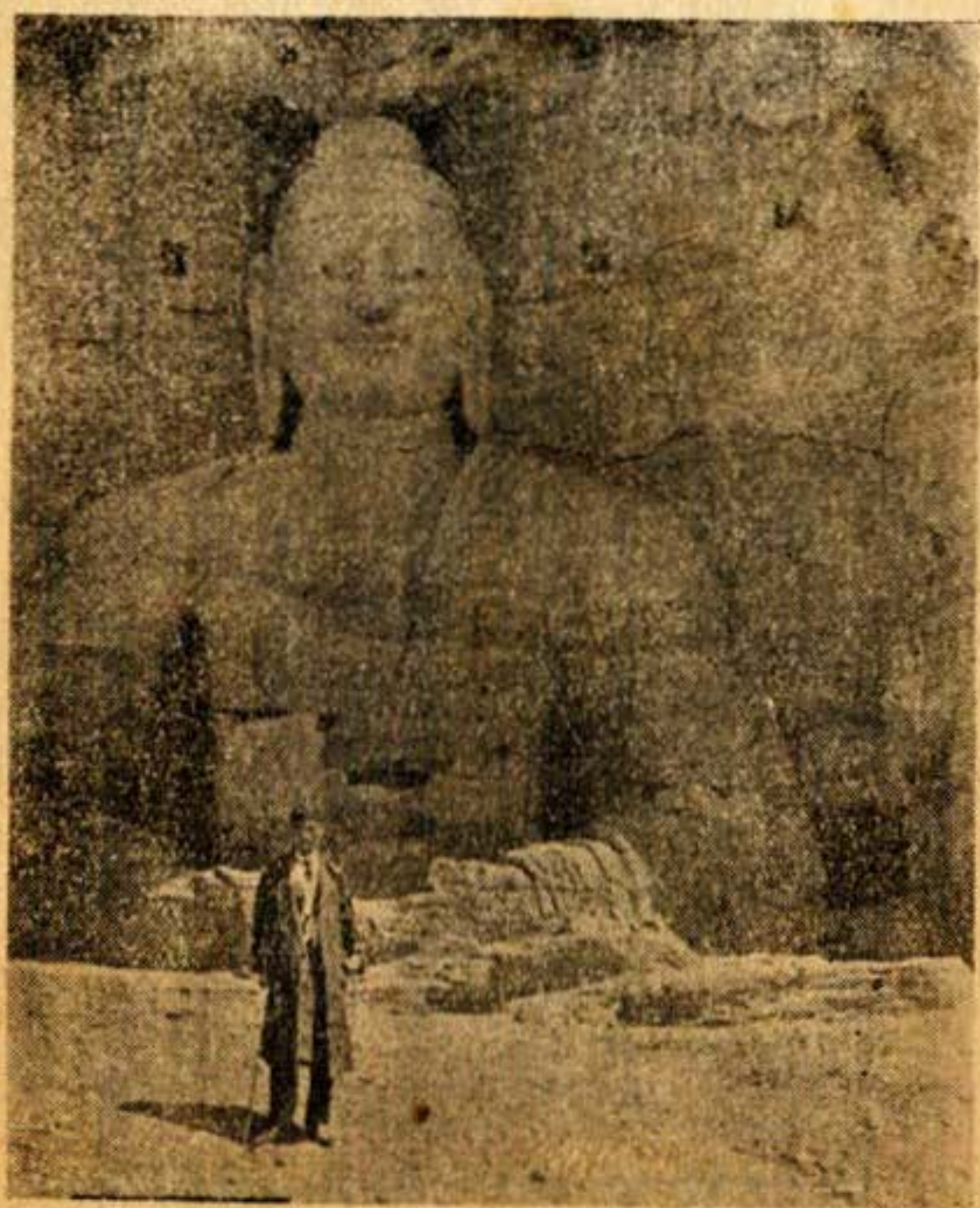
且つ佛教復興の命を受けられ、人心の安定、社會の和平に心を碎き、一方寺院佛塔の再建造立にまた不幸にして熾失、散逸した諸經典の搜集や翻譯に力を盡されたが特に、石佛開鑿の大業を發願して、帝に請ふてその聽許を得、早速着工の運をつけられたがこの聖業は大和年間を経て前後百餘年の歲月と、莫大なる經費を要し、幾多の

人力をかりて苦心經營漸く出來上つた千古不磨の一大藝術で、今より約千五百年前のことであるが當時一般民衆の廢佛に對する復興の熱意と、人心渴望の信仰情火の大結晶によれるものなることを見通してはならぬ。

さてその當時この地方北支那一帶は瀛洲地方から南下して來た勇

敢な鮮卑種族の一部族でこの地方を征服して大同に都し、北魏帝國を立てたので、元より漢民族ではなかつた。

北魏は（今の河北省、山西省及河南省の北部地方）佛教には因縁深く、これより前には佛圖澄三藏やその弟子の道安法師が盛に遊説教化せられた所であり、續いて陝西省の長安



石佛の前に立てる筆者

（今の西安地方にして當時佛教興隆の都會として知らるゝに及び阿彌陀經や法華經や維摩經などの大乘經典が多數に翻譯せられたが、恐く之等も多く大同に傳はり、又印度大乘佛教を宣揚せられ譯經を以て有名な鳩摩羅什三藏が活躍せられた直後でもあつたが、更に北魏は西に進んで甘肅省涼州地方をも征服した、こゝは印度や中央アジア地方から佛教が流傳する要路にあたつてゐて大乘の涅槃經や、國土守護の金光明經等も傳はつたのみならずこゝは大同と佛教國の印度や中央アジア諸國との交通路にあたつてゐたゆゑ、その結果曇曜法師もこの甘肅省の涼州地方から大同に來られる様になつたのであらう。

人の心根に徹せる信仰は形式の法令によつて解消せられるものではない、廢佛令で、佛教の形態は毀されても人心奥深く沁み込んだ信仰の聖火は反て潛行し熱を増すことを知らねばならぬ。

石窟開鑿の動機につき關野貞博士は左の三大原因を擧げてゐられる、

一は魏室の太武帝廢佛に對する懺悔滅罪の情操なり、

二は北魏建國以來の五帝に對する追孝供養の意願なり、

三は曇曜の付法相傳以て佛法永遠不滅の祈願なり、

即ち太武帝が廢佛毀釋をやつたことに對する良心的懺悔滅罪の心持と、文成帝が父祖追孝に出發せし護國精神の發露であり、又高僧曇曜法師、及びその徒が佛教興隆、護法久住の熱烈な信仰心の顯現であるが、更に當時一般社會人も熱心なる佛教歸依信仰者多く、且つ起立造像が父母祖先乃至師長眷屬の供養となることを教示せられたので、競つて造像した形向がある。

第十一窟内東南隅上方に太和七年（皇紀一四三年）邑師法宗なる銘文の中に

太和七年歲在癸亥八月卅日邑義信士女等五十四人、自惟性因不積、生在末代中略

道教天下 紹隆三寶、慈被十方 澤流無外 乃使長夜改昏 久寢斯悟、弟子等得蒙法潤

信心開敷 意欲仰訓洪澤 莫能從違 是以共相勸合 爲國興福 敬造石廟形像九十五區 及諸菩薩 願以此福 上爲 皇帝陛下 太皇太后 皇子德合乾坤 威臨轉輪 神被四天 國祥永康 十方歸伏 光揚三寶 億劫不墜 又願義諸人 命過諸師 七世父母 内外親族 神栖高境 安養光接 云々と刻み込まれてあるは一つの證とし見るべく、今より約一千四百五十年以前に五十四人の信仰厚き信男善女が自己の深き罪障を懺悔し懺ましき現世の懊惱に堪え兼ねて至心にみ佛を慕敬し歸依合掌して、九十五區の石佛形像を造り、此の功德によりて盡忠報公上 聖恩に奉答し、國興隆昌を祈念し、下は七生父母、内外親族民衆の福祉を念願せるもの皆これ、大乘佛教思想信仰の現はれであり、七生報國盡忠思想の基調であつて、これこそ印度佛教が東方に流傳して支那に展開し發達し、東亞國民精神の糧となつた大乘佛教思想の眞髓がこの石窟に示されてゐると言ふべきである。

然して今第十六窟より第二十窟に至る五窟

は、北魏歴代五帝の追孝菩提の爲めの大佛五體なりと傳ふ。これ等巨大なる佛像に各皇帝の偉容を佛の姿として現はせるものにして、こゝに佛教が國家の宗教として且つ護國の宗教たることを具現せるものであり、又四方に四佛を配せるは護國經典と言はれる、金光明經の四方四佛を表せるものなるべく、佛教傳はる所、國家も無窮なりとの信念の表現である。

逸話 活人劍

鐵舟居士山岡鐵太郎は劍をもつて鳴つた人であるが生涯の中一度も相手を殺したり傷けたりしたことがなかつた。

鐵舟居士は毎夜遅くまで寫經するのが日課になつてゐた。人が寝しづまると鼠がチヨロ／＼這出して来る。初めは鼠の方でも警戒してゐるが、毎夜出て来て顔馴染になると、鼠も相手に害心のないことが分る。さうなると鼠は居士を友達扱ひにしてチヨロ／＼出て来ては肩の上や膝の上を這ひ廻る。筆を持つてゐる手先へまでからみつくが、それでも居士は少しもかまわず、そのままに任してゐた。

明治大帝が明治六年甲武國境に獵を催したまふた時居士もお伴を仰せつかつた。すると勢子に狩り立てられた眞白な小兎が居士の前へオド／＼しながら走つてゐたので居士はいきなり抱き止めた。

聖上はこの有様を御覽ぜられ、居士に仰せられた。

「その小兎は持ち歸つて飼養してつかはせ」

「畏りました」と、その小兎は御苑の中に飼はれることになつた。

居士はかく劍を學びながら、生物を活かすことを悟つた。居士の劍は殺人劍に非ず活人劍であつた。「人を斬らず、人に斬られず」の極意を得た人であつたのである。

らう、この金光明護國の思想や、涅槃經典の如來常住、一切成佛の信仰を始め、法華經に依る多寶佛と釋迦佛と並び座し給ふ説相等、大乘佛典の教相がこの大石窟群彫刻に具現せられてゐる。

顧みて往古千五百年前この石佛開鑿は北魏人の厚い佛教信仰の具現であり、淨土往生思想の表現である。而して正に來るべき東方大乘佛教展開の根基ともなつた聖域である。

今眼目遙かにこの砂塵天を掩ふ朔北の寒村雲崗に思ひをよするとき、法相莊嚴の石佛は西方勝緣の淨土相として昔ながらに清く懐しく影じその尊き慈眼を仰ぐとき過去の罪禍も現世の苦難懊惱も一切忘れしめ壁間無量の菩薩の散華、歌舞の妙音心耳に聞ゆるを覺えその廣大なる慈恩の光被を感知し、

今皇軍保護下にあるこの靈像群に參拜し我が皇軍の武運長久を祈念すると共に今事變に於ける日支陣歿勇士の忠靈に對し大乘佛教の怨親平等なる冥福を祈願する機を得て寔に尊く意義深き極みである。



双生子ではな

かつた話

小 林 正

女房が妊つてから、日當りと空氣の良い家を見付けて引越さねばならなくなつた。と云ふのはこれ迄ゐた家が、會社への通勤が便利でしかも家賃の手頃な家と云ふ目標で捜しあてた家だけに、舊市内にあつて、俗にお妾横町とでも云ふのか、不思議と圍ひ者ばかりのかたまつてゐる横町の、ひどく日當りの悪い、じめ／＼した陰氣な家だつたので、妊婦に良くないのは勿論、生れて来る子供の健康が先づ氣が／＼になつたからである。

そこで、「よくまあ、こんな處に家を見つけたね」と人から驚かれるやうな郊外の高臺で、畑をつぶして空地にしたばかりの、相當

廣い面積にまだまばらにしか家の建つてゐないその一軒を借りて引越した。

家は新しいが安普請で、梯子段が上り下りにぎし／＼鳴るやうな家だつたが、日當りも極く良いし、高臺だけに空氣のきれいなのが何よりも氣に入つた。

女房もすつかり落付いたと見えて、引越した日から目に見えて健康になつて行くやうだつた。

「先にゐた家は厭な家だつたわね。あんたなんか一日外に出てゐるから解らないけれども、實に陰氣な家だつたわ、——それに近所はお妾さんだらけで。便利は便利でも感じの

悪い處よ。」

そんな譯で、女房は健康になると一緒に至極明朗になつて來た。ご近所と云つても軒を接したお障りの一軒と、道をへだてたお向の二軒、それに南向きの窓越しに見渡せる空地の向ふ側の、これは借家ではなさそうな立派な門構への住宅が一户、都合四軒だけがまだこの高臺の住人であるに過ぎなかつたので、うるさいおつき合ひと云ふものがなかつた。

お妾横町にゐる時と較べればそれは雲泥の差であつたに違ひない。

「お隣りの旦那様つて、とても肥つて立派な人よ」

越してからしばらくして女房がさう云つた。私は朝晩しか家にゐないし、休みの日には終日二階でごろ／＼してゐるから、隣近所のことなどは一寸も解つてゐなかつたが、階下の茶の間からは窓越しにお隣りの家を覗き見することが出来るので、女房と女中は女らしい好奇心からお隣りの様子を時々偵察してゐるらしいのだつた。三人の子供をもつたそ

の家の奥さんとは勿論口もきいてゐるらしいが、旦那様を見たのはその時が始めてらしい。

「どうだ、俺とどつちが立派だ。」

「そりや向ふの方がずっと大きくて立派よ。」

「そんなか生しちやつて。」

「そりか、髪を生して立派なら俺だつて生せるぞ。」

「およしなさいよ、見つともないから。貴方



が髪をはやしたら漫畫みたいだわ。」

と女房は亭主に悪たれをついて、結局は夫婦は聲を揃へて大いに笑ふのだつた。

女房の腹はだん／＼大きくなるし、體重も十五貫を越へるやうになり、三度の食事は人の二倍も食べるやうになつた。亭主はその腹を見ながら、お産の費用、生んでからのことなどを頭を撫でながら考へる日が多くなつた。

その中に、女房はご近所についてまた新しい発見をした。

「空地の向ふの家の旦那様知つてゐる。」

「知らんね、君のやうに他人の旦那様の心配ばかりしてゐないからね。奥さんのこと

なら少しは氣になるが……」

「ところがね、あそこの家の旦那様がお隣りの旦那様とそつくりなのよ。きつと兄弟ぢやないかと思ふの。とても良く似てゐるわ、矢張り身體が大きくて。それに髪までそつくりなの。——きつと兄弟よ。」

女房はその二人の旦那様を兄弟にきめてゐた。女中までが、「ほんとによく似ていらつしやいますわ」と女房に同意した。

日數がたつて、ご近所とのつき合が繁くなるにつれて、こんな風に女房と女中とは、色んなことを噂き出して來ては亭主に報告した。

「君らはどこか興信所にでも勤めると良い月給がとれるぜ。」

なぞと、女共のさかしさを嗤つたものゝ、話題にとぼしい生活にはそんならわさ話も幾らかの魅力を持つてゐたのである。

「あの人達は双生子よ、双生子の兄弟よ、きつと。」

と、その後もその二人の似よつた旦那様の觀察を怠らなかつたらしい女房は、或る日頭二人を双生子と云ふことにきめてしまつた。なるほど、この一瞬に双生子の兄弟が、それも堂々たる紳士として住つてゐると云ふことは興味ある街の話題になりそつた。で、私も一度お隣りの旦那様とお向ふの旦那

那樣とを比較して見たいと云ふ欲望が起つて来た。

ところが、その翌朝、偶然出したに問題のお隣りの旦那様に出逢つてしまつた。いかにも、格腹のいゝ堂々たる紳士で立派な髭をたくはへてゐた。いんぎんに挨拶をされたが、その物々しい物腰が、勤め先の重役に似てゐるので、こんな風の人物が二人までもこの一軒に住つてゐると思ふと、いさゝか壓迫を感じざるを得なかつた。

風も空も土も、もうすつかり夏らしくなつた或る晩、久し振りで食卓に麥酒瓶を見て、私は女房の心意氣に感謝しつゝ、さゝやかながら、くつろいだ食事をつつてゐた。

「解つたの上。」と女房は自分の新しい發見に凱歌をあげるやうな調子で云ふのだつた。

「隣の旦那様ね……」

「また隣りの旦那様かい？」

「それが大變なの。空地の向ふの旦那様、ほら、私が双生子の兄弟だと云つた旦那様ね、

あの人と同じ人なのよ。双生子でも兄弟でもなんでもない。同じ人なのよ。」

「へえ、——するとどうなるんだい。」

「今日きよがお向ふの家の女中さんに聞いて來たの。お隣りの家の方がお妾さんで、一日おきに、あつちへ行つたり、こつちへ行つたりするんですつて、——似てゐる筈だわ、同じ人なんだもの。」

と云つて女房は笑つた。

「だつて、お隣りにも子供が三人ゐるし、向ふの家にも子供がゐる様じやないか。」

「えゝ、矢張り三人ゐるわよ。お妾さんだつて子供は出来るでしよ、だから不思議はないわ。」

「なるほど。それで、君は一日をきにこつちの家と向ふの家とから出て來る旦那様をかはるゝ見て、それで双生子だと云ふ結論を下した譯なんだな。こりや大笑ひだ。」

と夫婦はまた聲を出して笑つた。

妻と妾とを同居させてゐる人もあると云ふ話を聞いたこともある。或る地方で、妻が夫

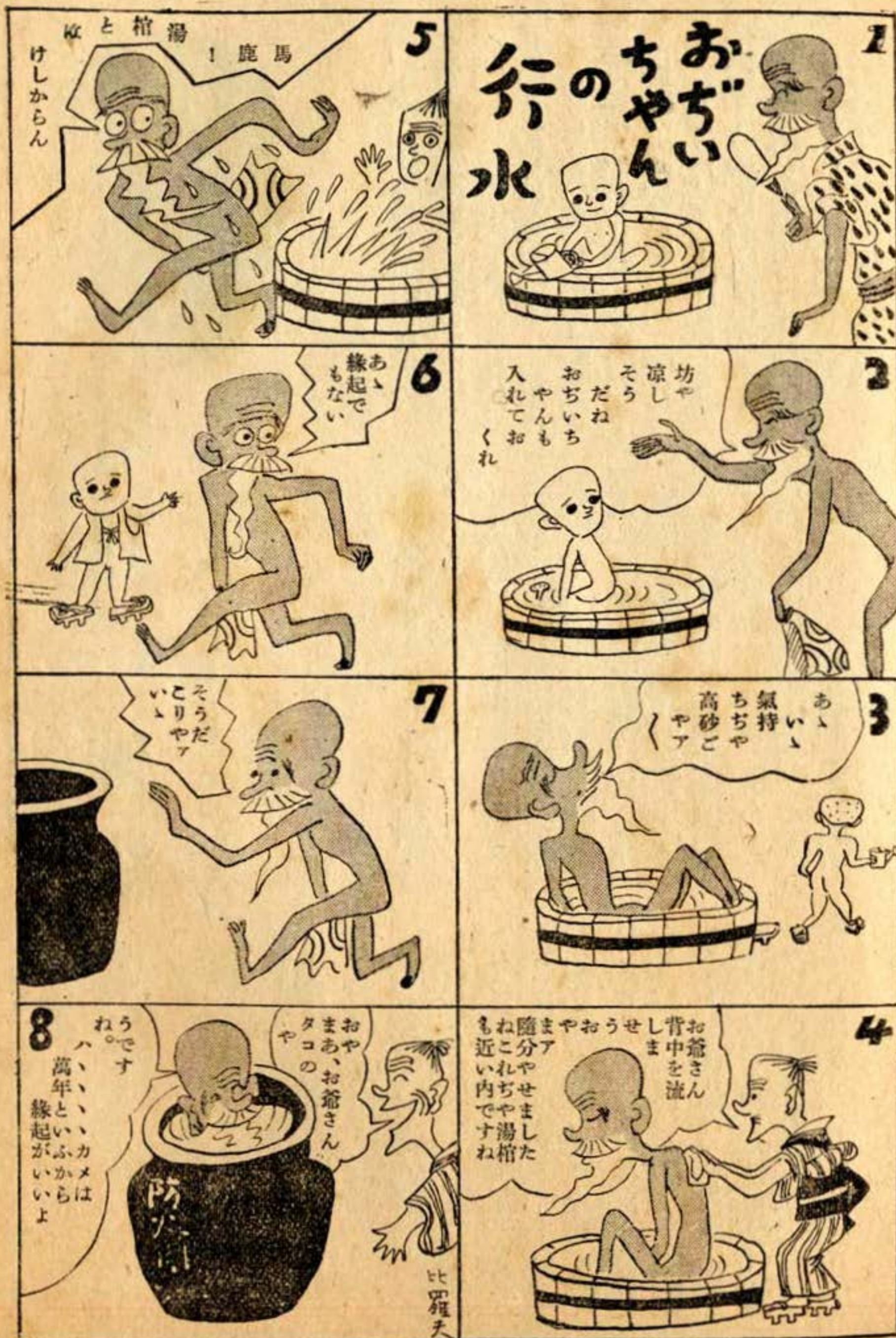
に妾を持てとすゝめるところも未だにあり、妾を圍ふことが一種の見榮になつてゐるところもあるさうだ。さすれば空地一つを距てた向ひ合せの地に本妻（妙な言葉である）と妾とを置き、都合六人の子供を抱へて、雙方を隔日に往來してゐると云ふこの事實も、俗界の眼を以てすればあへて異とするに足る風景ではないのであらう。

が、普段は小賢しいことを云ひながらも、この俗世間の茶飯事を直感し得ずに、鼻下に髭をたくはへた堂々たる一人の紳士を二人の人物に區別し、しかもそれをまた双生子として結び付けた女房の心情を思つて、亭主たる私は再び明るく笑つたのである。

「また、お妾さんの近所へ引越して來てしまつたと云ふわけだね。」

「そりよ。——でも、世間には随分お妾さんてゐるものね。」

さう言つて、改めて女房は女らしい愁ひの眉をひそめるのであつた。





有難い佛緣

英譯「法然上人傳」の成るまで

石 塚 龍 學

佛教、殊にわが淨土宗が明治に入つて、

ほんたうに教學に眼覺め、何かしなければならぬといふ氣運に動かされて來たのは二十年代、それも日清戰役の前頃からであつた。しかしいまの言葉で佛教徒が所謂社會に呼びかける仕事といふのは、當時の情勢では佛教の眞の意味を廣く外國に知らしめることであつた。それは明治天皇の五ヶ條御誓文の「知識を世界に求む」の御精神を體して、何事も世界的と云ふのが世間一般の風潮であつたから。諸外國から來めらるだけの知識を吸収すると同時に、我國の

眞價を世界に示す、と云ふのが國民全體の意向であつた。

私は明治二十六年に佛教研究を志して上京したが、まつさきに外國語獲得の必要を痛感した。小石川の淨土宗本校には校長黒田眞洞師主宰の英字佛學會があり、私の入學當時は英語獎勵の渦が到るところに沸き立つてゐた。明治二十八年の春、高等學院ではじめて英譯「東方聖書」四十九卷に接したときの感激は未だに私の胸から消え去らずにゐる。その中の淨土三部經を早速借覽に及んで、一々英和辭典と漢譯書に照

し合はせながら、私は牛の歩みのやうな讀み方をしたものだつた。がその頃の私の微々たる語學力を以てしても、佛典を讀むには古い國語や漢文を通じてよりも、英語で當る方が非常に理解し易いものだと思つた。そのうへ、世界語即英語のことを考へると、これはどうしても外人なみの語學をマスターしなければならぬと、私はひそかに勇猛心をふるひ起したのであつた。先輩である今の京都佛教專門學校の小林瑞淨校長ともいろいろ意見を述べあつたが、外人の手による佛典の英譯には我々が考へただ

けでも原典の意義の曲解が尠からずある、これはどうしても我々日本佛教徒の手によつて世界に正しい英譯佛典を普及せねばならぬ、といふ結論に達したのであつた。そこで一日も早く同志を叫合して、大藏經全部の英譯事業を企てたいと思つた。そのまへに、英語を徹底的に自己のものとするには、どうしても彼地に渡つて勉強することだと思ひ、私は龜井麟應君とともに米國行を企てたりした。これは結局旅費の點で沙汰止みになつたけれど、後で私は英語研究のために、青山學院に籍を置くやうな事になつた。——その頃、ちやうど日清戦争直後で、我々僧侶は全く社會から見捨てられてゐる有様だつた。小石川時代、私達はみな黒衣で外出してゐたが、路傍の子供達は勿論、相當な紳士風の者までが、「チヤン／＼クソ坊主」とあくたれたものであつた。その罵言を耳にするたびに、私達青年僧侶は眞剣になつて、僧侶の地位の引上げ

を社會に示さなければならぬ決心を固めて行つた。私が經典の英譯に志したのも、一面さうした社會的の意味をふくんでゐたのであつた。

青山學院は或事情のため一年半ばかりで止めたが。その後東京帝大の哲學科に移つてからも、英語研究のため、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）や齋藤秀三郎氏の講義時間には缺かさず出席した。年月をはつきり覚えてゐないが、大阪に大博覽會のあつた折、大阪教區の申出で黒田師の「佛經の光」が英譯されることになり、その翻譯に椎尾辨匡、笹本戒淨、大島泰信の諸君と私の四人が當ることになつた。しかしその翻譯の期間が一週間ほどしかなかつたので大へんあわてた。「佛經の光」はほんの小冊子だつたが、扱とりかかつてみて、今更のやうに翻譯の困難を知つた。とにかく一週間目きちきちに一通り譯し終り、私が清書して東京のアーサー・ロイドに訂正を頼み

に行つたが、殆ど譯し直しになつてしまつたくらゐに訂正されたので、如何に翻譯の難きかをつくづく味はされたのであつた。

それは幸、出版されて博覽會に間に合つたが、その後私は椎尾君と二人で英譯選擇集を企てた。然し事情がゆるさず、僅か一章段ほどでそのことは立消えとなつてしまつた。その頃からこれは自分一人の手で何かせねばならぬといふ考が、私の心底にしきりに動いて來た。當時、小石川表町の見樹院の近所に、早大講師で英語自宅教授を開いてゐたドーソンのもとに通つてゐた私は、或日彼と宗教論を戦はせたことがあつた。ドーソンはもとよりキリスト教徒であつたが、英譯「大乘佛教大意」（黒田師著）を讀んで呆れたほどに佛教はつまらぬと云ひだしたのがキツカケだつた。私がいつたいどろいふ點でそんなことが云へるのかと問ひ返すと、彼は眞顔になつて、宗教は哲學でない、然るに佛教は觀念の遊戲にすぎ

ないではないか、と答へた。そのとき、私はぐつと胸を衝かれる思ひがしたのだ。といふのは、(勿論)ドーソンの佛教觀をどうかういふのではないが、佛教の眞髓を世界に一日も早く正しく知らしめるには、複雑な教義のみを説いてある經典では不可である、これはどうしても血もあり肉もある求道者の體驗録の如きものでなければならぬ、このことがはつきりしたのだつた。そこで私はいろいろ案を立てた結果、まづ獨立で「勅修御傳」の英譯を志した。御傳には法然上人の御一代記のみならず、淨土宗とは如何なるものであるかといふことが一切含まれてゐる。私は「勅修御傳」に思ひつくと、これこそ私自身の生甲斐のある最初の仕事だといふ氣がした。

それは明治三十九年のことであつた。十四年は法然上人七百年の御遠忌に當る。それに間に合ふやう、五ヶ年の仕事は私の全精神をとらへたのだ。そして私は仕事に

かゝつた。ところが、いざかゝつてみると大へんである。一語の翻譯にも眼をまはすほどの選擇がいる。序文だけでも、三、四時間で出来ない。——こゝでちよつと個人生活の點を挿むと、私は三十九年四月から海城中學校長の職をもつた。ちやうど學校建築事業の最中に就任したので、校長として當然その事業に手を借さねばならず、事務の煩雜さと云つたら話にならぬくらいであつた。勞務の餘暇を全部翻譯に捧げたい心願が、こゝで當初から見事にはづれてしまった。土曜日の午後、日曜日の晝間も、私には自分の時間が殆どなかつた。教員室の閑散な時間、夜の書齋のしじま、さう云つた私の仕事に當ててゐたはずの時間は、遂に水泡のやうに消えて行つた。それでも私は自分を轢ちながら、睡眠時間を二時間短縮して辛うじて仕事をつづけた。かうして四十二年の春頃、私の仕事は第五巻を終へてゐた。その頃、私は自分の仕事を一層

正確にするため、高等學院時代からの知己で大學院にゐたカナダ人 H・コーツに草稿を見てもらつた。すると彼は以外なほどよろこんで、自分も佛教を研究したいからと云つて、私に協譯者たらんことを申込んで來た。そこで私は彼とまる十七年間、——思へば夢のやうな氣がする——寢食を忘れた聖職に身も魂も捧げ合つたのであつた。運は私に向いて來た。私は荻原雲來校長の芝中學校に轉任し得て、はじめて自己の教職と仕事の一體を認め、感激した。一週に二度、私は出來ただけの原稿をもつてコーツの宅を訪ねる。そして彼と二人で深更まで檢討する。學校に於ても、私は自分の授業時間以外は教員室で仕事をしつづけるだけの餘裕を與へられた。日曜日など、朝から自坊の書齋に引籠つて仕事に専心していると、寺務や來客のこと一切を忘れて思はぬ失態を繰返すのであつた。午飯時に、牛乳壺とインク壺をとりちがへ、えらい目に

合つたことがある。——暑中休暇には仙臺高山、瀨名湖の湖月、辨天島の清水氏別荘などへヨーロッパと同行し、互に激勵しあひながら仕事に没頭した。

大正五年二月、芝中學校が火災に遇ひ、その後一年ほど仕事を中絶したが、同年には仕事もどうやら完成に近づいた。十一年京都知恩院で出版にかゝり、三百頁までのところで關東大震災の厄にあつたが、十四年八月には無事完成、出版の運びとなつた。

仕事中、種々經濟問題については淨土宗務所、また知恩院の御世話になつた。出版については、はじめ大正十三年三月の淨土完開宗七百五十年記念出版として、椎尾君の手を煩はし、知恩院に頼んで戴き快諾を得たのであつた。出版費用二萬圓の豫算は、當時の知恩院執事長寺西聰學氏が門末會議の折、いろ／＼世話をはかつて調達されたもので、そのときの私の感謝の念はい

まもつてかはりない。その前、名古屋松坂屋、ニューヨークのマクミランなどでの出版の話もあつた。印刷は東京の三秀社でなされた。

話し落したが、大正四年頃、渡邊海旭君の發起で、荻原、椎尾、大島の諸君らと毎週一回、私の英譯御傳の評定會を、牛轡をつつきながら開いたことがあつた。それを二年ほどつゞけてゐるうちに、いろ／＼の事情によつて椎尾君と私だけの會になつたが、それでも第四十二巻までつゞけてやつたと記憶してゐる。その渡邊、荻原の兩君も既に物故せられてゐるのを思ふと感が深い。

今になつて過去の仕事を振り返つてみると感慨無量の語に盡きるけれど、たゞ私としては、あの仕事を自分の専門としてそれのみにかゝりきりであられたら、五ヶ年間で優に完成し得たらうと思ふのである。しかしまた一面に、私の仕事もたゞ阿彌陀如

來のお指圖によつたことと思へば、却つて長年月の精進をつゞけさせて下すつた有難い佛縁に幸福を感じずにゐられない。のみならず、人の一生は短い。ひとりの人間のなしうる仕事は質量ともに限られてゐる。私は私の生涯の序曲としてはじめた仕事に、どうやら私の一生の唯一の仕事とならうとしてゐる。が、私はそれで満足してゐる。(終)

(カッとは石塚龍學氏)

新柄アツパツ

「とこすで柄なシダモンへいた僕奥、あま」
「のすでんめしおの供子はれこ、えい」
「う通のこてしませ合ぎ撫らかたしまりなくなら要がめし」





A 佛壇の金

或日淨林寺（大阪府泉南郡吉見）の老和尚
石田了定師（六十九）が、檀家である辻莊七氏
の宅に参詣すると、佛壇の三寶に、銀貨や銅

貨や、紙幣を取りまぜて、盛つて供へてあつた。

これまでも、二三回かうして供へてあつた事もあつたが、今日はそのかさも大きく、一寸見たところでも、三四百圓もあるらしく思はれた。

餘り度々のことなので、不審に思つた和尚は讀經を終へると、主人に、

「お宅では、何故お金を供へるのです。」

と、佛壇に供へて置けば、多分安全であるからであらうと思ひながら訊いて見た。

「いやお和尚さま、私達一家の者が、かりして安樂に日々暮さしていたゞけますの

信仰實話三つ

も、元はと云へば、みんな御先祖さまの御蔭でございます。至ては御先祖さまのお力ですから、お金がはいりました時は、そのまゝ、先づ御佛壇に供へる事にしてゐます。實は今日、玉葱を賣つたお金が、七百圓程入りましたので、お供へしてあるのです。」

と、辻氏は謙遜しながら答へた。この邊は玉葱の名産地である。

「それは誠に感心なお心掛です——。すると澤山入つた時には、御布施の方も張り込んでいたゞくんですね。」

「お和尚さんが、そんな慾ばつたことを思

つてはいけませんよ。」

「アハハ……」

「アハハ……」

二人は、互に顔を見合せて笑つた。

B 先祖へ會計報告

この事を深く心に感銘した和尚は、次の日、同じ檀家である原清三郎氏に物語つた。

「そりや感心ですね。和尚さん、内の法儀は一寸變つてゐますよ。毎月會計報告を行つてゐます。」

「え、會計報告ですつて？」

和尚は、耳新しい原氏の言葉に、目を圓くしながら、つり込まれて訊いた。

「そりや一體どうしてするんです。」

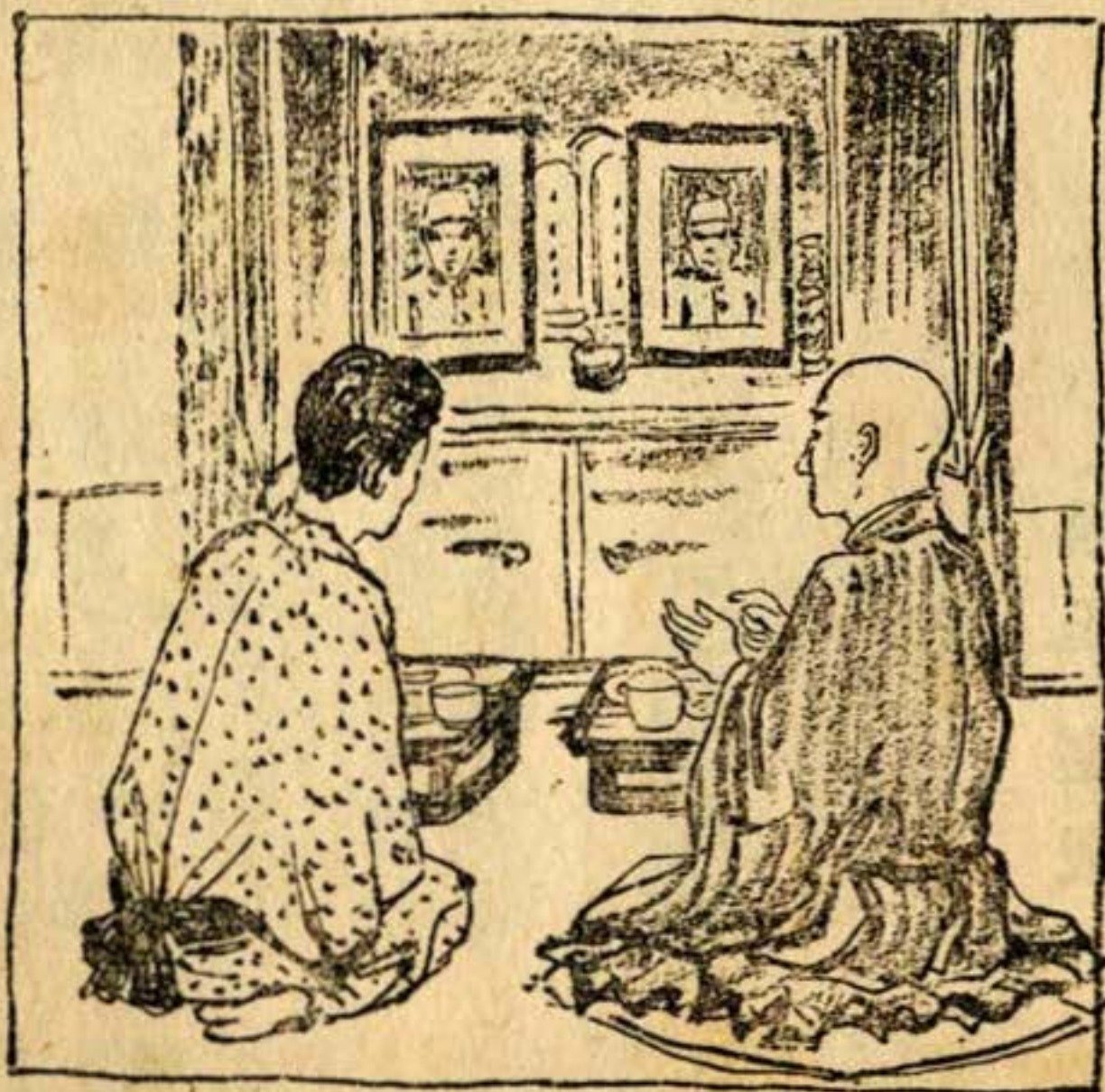
「つまり、毎月の收支を月末になると、御佛前で、御先祖に報告するんです。」

「そりや奇抜です。」

それは、實際、和尚が感心するように奇抜

なやり方であつた。

「五錢の焼芋を買つた事から、二錢のハガキまで入費は一々報告します。」



「ホオ。」

和尚は、只々興味深げに訊き入つた。

「一番時間がかかるのは年末ですよ。」

何しろ一年間の總決算を、報告するんです

から、時によると聲もかすれて來ますから、交替でやります。而しかうして、すっかり御先祖に報告を終へて、元旦を迎へますと、その氣持は、又何とも言へませんよ。」

と原氏は語つた。

和尚は原氏の話を訊いてゐる中、自分

はまだ、佛恩報謝の念の起し方が足りないやうな氣がして、氣恥しく思はれてならなかつた。

そして「葉隠」にある、

「先祖の善惡は、子孫の請取手次第」と言ふ言葉をふと思ひ出した。

C 二つの陰膳

それから數日して、有地重次郎氏を訪れると、佛壇に勇士の寫眞が二枚装つて

あつて、その前に、お膳が二つ供へてあつた。

これは同家から出した岩雄、正雄の兩勇士

のために、蔭膳を供へてゐたのだつた。

而し、それにしても、場所もあらうに佛壇に寫眞を祭つて蔭膳をしてゐるのを見て不審に思つた和尚は、

「有地さん、寫眞を佛壇に祭つて蔭膳を供へても、どうとも感じませんか。」

と、或は蔭膳のすえ方を知らないで、さうしてゐるのだつたら、注意して上げたいと思つて訊いた。

「ぢやあ、和尚さん、戦死したと同じだと云はれるんですか。」

當の有地氏は、案外と言つた氣で、微笑しながら反問した。

「佛壇に供へると、まるで名譽の戦死をさされたやうぢやありませんか。」

「そりや又和尚さんらしい考へぢやありませんね。」

「どうしてです。」

和尚は、有地氏の心中を解しかねて訊いた。

「二人の仲は、既に御國へ献げた身體でござ

います。勿論、生きて歸つて來るとは、少しも思つてゐません。二人ともその覺悟で、勇ましく出征してゐます。既に戦死を覺悟をしてゐる仲達のためには、佛壇で寫眞を祭つて蔭膳を供へてやる事こそ、仲の心に叶つたやり方だと思つてゐます。」

と、軍國の父らしく有地氏は、凛然として語つた。

有地氏のけなげな言葉に、思はず襟を正さずにもられなかつた和尚は、目頭が熱くなるのを感じた。

その時、

晝食のため學校から歸つて來た弟妹等は、佛壇の前へ、きちんと座つて、

「兄さん、只今、お先にいただきます。」

と、ビヨコンと、おじぎをして出て行つた。

鶴田 湛泉

鈴木金平畫

——(三七頁より)——それは肉眼でも見得られる事です。何も苦勞して精神統一してまで佛像を見なくてもいいではありませんか。六十萬億恒河沙由旬の佛はそんなちつぽけなお姿ではありません。天地一杯です。然かも有所得の氣持は畢竟凡夫の小さなはからいのです。

それは信仰に入る過程としては許されませうが、それを以て得たりとするなら間違ひです。

また貴君は「ナムアミダブ」では息が調和せず「ナムアミダブ」の方が調和すると思つて居られるやうですが、成る程初めはさうに違ひありませんがそれも訓練されれば同じ事

でせう。習慣になればいいのです。然し木魚を打つ時は無論二字づゝで進む方が樂ですか

ら一般に「ナムアミダブ」と云ひます。要は本氣で如來様に「南無」する事です。それが第一です。息だの血液だのと餘計な心配はせぬ方が本當です。やりよいやうにやられたらいいでせう。そして貴君の氣持に合ふやうに

やられたらいいでせう念佛はむづかしいものではありません。

ではありません。

信仰相談 中村辨康

阿彌陀如來とは？

— 信 —

(問)

本尊阿彌如來の佛體の根源を解説して下さい。

— 仰 —

淨土誌をもつと向上させて多く讀みたいと希つて居りますが、如何でせうか。紙数を倍加して經典の解説や宗教講話を御願ひします。然し戒律生活のやうな私達に縁遠い事よりも修養になるもので、しかも難解と思はれるものを通俗的に解説して頂くのが大變結構かと存じます。(神戸兵庫中道通・大味サダ子)

(答)

此欄の問題としては少し問題が大きすぎで簡單に行きませんし、重要な問題だけに輕々しく取扱ふことも出来かねます。然し折角の御尋ねですから極大ぎつぱに申し上げませう。

(55)

先づ考へ方として自分の「命」の問題から

考へ始めるか、又は自分を生かして呉れる周圍即ち天地大宇宙の問題から考へ始めるかの二通りある筈ですし、此人生觀宇宙觀も純然たる理論的な行き方をすれば、謂ゆる哲學になります、其處に感情を加へることに依て宗教的なものとなります。

今ま一方的ではありませんが、宇宙觀的に見ますと、申し上げるまでもなく私達の周圍は一見個々別々に行働して居るやうですが、深く觀察すればお互ひに非常に密接な關係を持つて居て互に生かし生かされて居ります。私達の周圍に起る善惡禍福利害消長の悉くは色々な渦紋を巻き起しつゝ互に因となり縁となり果となり兎にも角にも刻々に流れて行きます。それは何んな現象でも此法則をはづれ

信仰上の御相談に應じます。御質問はハガキに住所氏名御名記の上、信仰御相談係宛御送附のこと、誌上匿名は可。

る事はありません。だから自然現象でも人間現象でも一切は近い縁を持ち親しい縁を持つて居ります。然し遠近親粗は單に小さい比較上の區別にしか過ぎなく、之を大觀すれば同一の「縁」のつながりです。しかも其「縁」に依て現はれ現はれして行く推移は「時間」なくしては有り得ない事で、如何なる現象も、例へば無生物でも皆な時間を所有して居ります。時間は「いのち」です。一般に「いのち」は「生物」の所有する時間のみ云はれた名稱ですが、其本質的な要素に變りはない筈です。無生物存続上の時間も生物存続上の時間も時間たる上に於て異つて居るものはありません。しかし此の豎の「時間」と前に申した横の關係即ち「縁」との二つは凡ての現象の上になくしてはならぬ要件であることは一點の疑ふ餘地もありますまい。然も此條件は常に變らぬ不變の鐵則であると共に、

其與へられたる「縁」は私達への恩寵であり「時間」そのものは私達の「いのち」の根元です。いやその「時間」さへ私達への恩寵で、天地間のありとあらゆるものは私を統攝し私を恩恵しつゝ永遠長久に活動續けて居るものです。だから時間的には無限であり、縁起的には無量であります。此時間の全綜合即ち「無量壽」と、縁起の全綜合即ち「無量光」とは一切の現象の根元でありまた秩序の根源であります。此根元なくして一切の現象は現はれません。此根元なくして私其ものは有り得ません。此根元は私達の生みの親であり育ての親であり、それが阿彌陀の理體であります。

ります。

ところが十劫以前に於て一人の法藏菩薩なる人があつて其卓越せる般若と深い直観と劇烈な修行とに依て此理に透徹し、遂に此「阿彌陀」に融合し歸一し體現して「阿彌陀佛」になられたので、之を信仰上の本尊として此の「阿彌陀佛」に南無し歸命する時始めて私達に「阿彌陀如來」が感ぜられて参ります。以上は甚だ簡單ですが、委しくは「信仰讀本」や「念佛讀本」等を御覽下さい。次に「淨土」の紙數を倍加する事は今の處出来ませんが、出来るだけ内容に注意することに致します。

念佛の唱へ方は？

(問)

口稱念佛に「ナムアミダブツ」と略稱することは敬虔な氣持の上から何うかと思つて居ました處、徳本行者も之を忘れたと申されたさうです。然し念佛三昧に入るには「ナムアミダブツ」では何うも駄

(答)

目なやうです。息が調和しない爲に精神と血液の流れも安靜しません。之に對する御解決をお願ひします。(荏原・樹下生) 徳本上人がなまつた念佛即「ちなンマンダー」とか「ナモウダ」と

か云ふやうな念佛は佛體を害ねるものとして嫌はれた由であることは、本上人御説教の聞書などに残つて居りますから確かな事でせう。即ち「六字分明に唱へよ」とやかましく云はれたらしいです。然し「六字分明」と申しまして南無・阿彌・陀佛」と二字宛ハツキリ切つて續けられたらしいので「佛」を「佛」といつて續けられたものではあるまいと思はれます。續ける時には「ナムアミダブツナムアミダブツ」では初は中々御説のやうに調子が取れませんからです。淨土宗で「十念」と云つて十聲稱へる時は八聲までを「ナムアミダブツ」とし第九聲を「ナムアミダブツ」とし第十聲を「ナムアミダブツ」と唱へる定めになつて居て、息の都合上「ブツ」と云ふのは十聲のうち一遍だけになつて居ります。徳本上人も念佛を續けられたとき恐らく「ナムアミダブツ」だけではなかつたでせうか。私は徳本上人の事をよく調べてありませんからよく存じませんが、言葉の使ひ方や息の具合から考へてたまらない限りの不自然でない形になる

事は當然だと思ひます。元來「佛」と云ふのは「佛陀」の略稱ですから正しくは「南無阿彌陀佛陀」でなければならぬし、もつと委しく云ふなら「阿彌陀佛陀に南無す」と云ふ意味の「南無阿彌陀佛陀」と稱へなければ完全でありませんから「南無阿彌陀佛」でもやはり略稱です。だから「ブ」も「ブツ」も略稱たるに於ては五十歩百歩です。徳本上人の云はれた意味は「念佛を粗略に唱へるな」と云ふことで粗雑にすると敬ひの氣持が抜けて歌でも歌つて居るやうになり易いからだと思ひます。

唯か本當か知りませんが、昔蛭川新左衛門が「念佛師に「念佛するのに六字をはつきり云ふ人もあり略してなまる人もあり一定して居ないがそれは何う云ふものでせうか」とお尋ねすると「念佛師は「蛭川新左衛門」と呼ばれた。新左衛門は「ハイ」と返事をした。一休は重ねて「新左衛門」「ハイ」「イヤサ蛭川」「ハイ」「蛭新」「ハイ」「どうだ御前を呼ぶに丁寧に云つても略していつてもお前

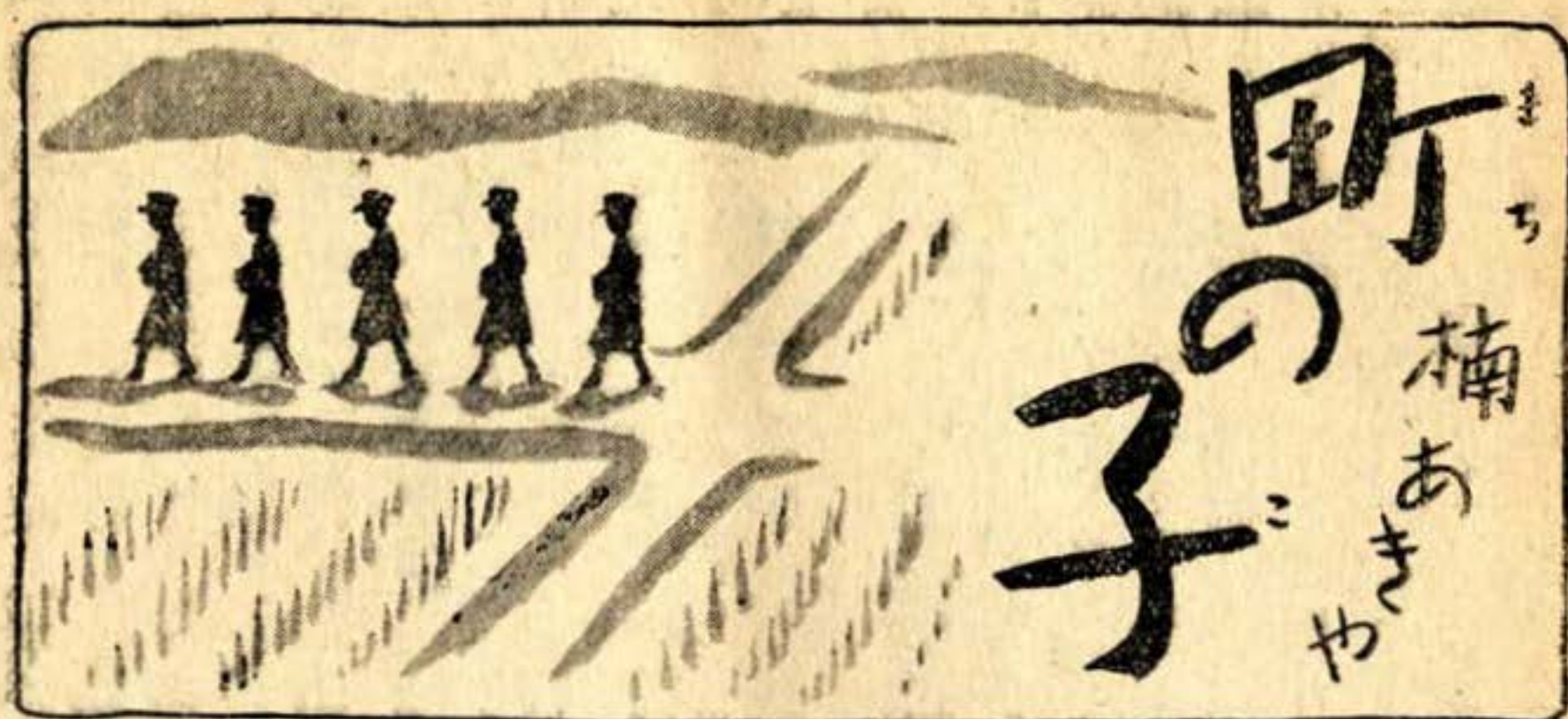
に通じたではないか。こちらに呼ぶ氣があつて呼ばれた人には何んなに略して云はれても通ずるのだ。念佛だつてその通りだ。こちらが眞實に呼ぶ氣で呼べば如來様の方へチャンと通ずるのだ。だからそんな事は問題にならんではないか」と云はれたと云ふ話があります。

敬虔な氣持を失はない限りなまつてもよいと思ひます。但し空也念佛の「ナモウダ」と云ふやうななまり過ぎたのは、第三者から見ると飄逸な氣持が多分で敬虔さよりも「歡喜踊躍」と云つた喜びが主眼になつて居るやうで何うも信仰的にシツクリしないかに思はれます。其道に入つて見ないとよく分りませんけれども……

次に御注意までに申し上げたい事は、念佛を三昧に入る道具に使つてはならぬと云ふ事です。眞劍に一心に稱へると三昧に入る事は出来ます。また三昧に入る事はよい事ではありません。けれども念佛は「定」に入るための道具ではありません。それは目的が違ひま

す。念佛は單なる言葉ではありません。如來に南無する氣持を言葉に表現したのです。だから散心の中から正念へ正念へと進む時、おのづから散亂心が止むのであつて初めから三昧に入るのを目的として居たのでは「念佛」にはなつて居ないと云はれても仕方がありますまい。

光明會では「見佛」を以て入信とし「見佛」する爲には「三昧」に入らねばならぬとして、結局「信者の人達が三昧に入らう」とあせるやうですが、それでは「有所得」の氣持ですから、よし訓練に依て「三昧状態」になり得ても本當の「念佛三昧」ではなく、念佛を道具に使つて精神統一しただけで「催眠」と均しいものです。隨て「見佛した」と稱してもそれは「佛像」を見たのに過ぎません。佛像的な如來様は本當の如來様ではありません。如來様は人間の想像するやうなお姿ではありません。無論如來様は「無量相」ですから理論的には其れも一分の如來相と云へない事はないでせうが、(三四頁へ續く)



(一)

「あー！ あー！ あー！」
と、道から道へ、二三人の子供が呼んで通ると、向ふの露地からも、こちらの百姓家からも、子供がばら／＼出て来る。

呼聲は段々大勢になつて、やがて此の里の寺へと進んで行く。

寺の本當の名前は淨泉庵と云ふのだが、村の人達は地藏堂と呼んでゐた。

そして地藏堂には尼さんが住んで居た。

村では此の尼僧さんを庵主さん、庵主さんと親しんでゐた。

此の里の子供達は、毎朝學校へ行く前に、此の地藏堂へ集つて日の丸の旗を堂前の柱に掲げてから、並んで學校へ出掛ける事になつてゐた。

「皆んな集つたのん」
高等二年の庄吉は、子供達を見渡して

から、庵さんと呼びに行つた。

庵主さんは、ニコ／＼笑ひながら、鼠色の着物に黒い腰衣で出て來られた。手に、日の丸の旗を捧げて——、
「皆さん、お早う——、さあ、庄吉さん、揚げとくれんよ。」

と、差出す旗を、庄吉は紐に結んで、靜かに柱に揚げて行く、子供達は一齊に脱帽して、旗を追ふて注目した。旗が一番先きに止つて、朝風に心地よく翻る時、庄吉の號令で敬禮した。

「はい、御苦勞さん。お地藏様も喜んでござる。一諸に手を掌せてお詣りしとくれん。——、すんだらのん、此の旗を拜んで、元氣に學校へ行つとくれんよ。此の旗に恥しくないようにのん。」
子供達は庵主さんに頭を下げると、二列に並んで出掛けて行つた。田圃道を通つて向ふに消える迄、庵主さんは寺の門に立つて子供達を見送つて居

た。

(二)

「昨日、あがつた木村つて子のん。並
んで行きやせんぞん……」

「はん、わしが、並んで行くんだぞん
つて言つたら、黙つて、どんく学校
へ行つちやつたぞん」。

善太は、皆んなの言葉を聞いて

「だけど、あの子まだ皆んなと慣れと
らんもの、のん。」

と、口を挟んだ。

昨日善太の組へ、町の子が轉校して
来た。朝禮が終つて教室へ入るとき、
先生に連れられて来た子、名前を木村
俊一と言つたが、顔の白い、眼のくり
くした、頭の毛を女の子のように長
くして、白い襟の付いた洋服を着て居
る。更に善太達を驚かした事は、背中
に、兵隊さんのように、鞆を背負ふて
入つて来た。

それに座席が善太の隣りだつたので
よく解るが、十二本入れの色鉛筆や萬
筆年は、子供の手にするものではない
と思はれた。クラスの皆んな
は、眼を皿の様にして、此の
町の子の動作や持物を凝視し
た。

晝のお辨當の終つた時、ポ
ケットから白い布を出して、
口の圍りを拭ふに至つては、
善太の仲間が開いた口が塞が
らなかつた。

「なんでい、大人を小さくし
た見たいだのん。」

「生意氣な奴」

と噂した。休み時間にも誰
とも遊ばなかつた。

善太は運動場の角に、壊れ
て地面に落ちたまゝになつて
ゐる、遊動圓木の永い丸太に



腰掛けて居る町の子の姿を見ると、な
んだか可愛そうな氣がして、近づいて
行つた。

「あんだ、遊ばまいか……」

「……」

「あんだ何處から来たんだ」

「……」

善太が聲を掛けたが、何んとも答へないで、終ひには、立揚るとズボンのポケットに手をつゝ込んで、口笛を吹いて歩き出してしまった。

「變な子！」

善太は裏切られた軽い怒りを感じたが、

「可愛そな子！」

と後姿を眺めてゐた。

一月、二月と日を重ねても、友達一人で學校へ来て一人で運動場へ出る。小さな手帳を胸のポケットから出して何か書きつけたり、厚い表紙の本を読んでゐたり、誰とも話しもせず、誰か話し掛けても、答へようとしな

いで、黙々と學校をすますと、また一人で歸つて行く。

高等二年の庄吉も、部落の皆んなも、朝地藏堂へ集らない事を、日が経つに連れて何んとも咎め立てしなくなつた。

善太は時々聲を掛けて見るが、返事をして貰へなかつた。

善太のクラスでは、此の町の子が先生の問ひに答へる言葉が、先生は正しい東京辨だと云はれるが、面白くつて、その度びにどつと笑つて了ふ。そんな時善太は、自分が笑はれる様な氣がして、あの子が變な言葉を使はなければいゝがと、ひやく／＼思ふのだつた。

(三)

夏休みになつた。町の子の所へは親類の子らしい、やはり都會の子が二人やつて來た。するとどうしたとか、今まで、外へ遊びに出ない町の子が、

毎日の様に、三人で大川へ釣に出掛けたり、捕虫器を振つて森へ出掛けたりし始めた。

大きな聲で笑つたり歌を唄つたりして、ひどく元氣に見えた。

善太はそれを見ると、どうしても不思議でならなかつた。あの子も、笑ひもし唄ひもするんだ、と。

だけど、やがて夏休みが終つて、親類の子供も歸つて了ふと、又もとの様に町の子は黙んまりで、無表情に戻り一人の動作が始められた。善太が聲を掛けても駄目だつた。

或日、部落の子供達は、別れ／＼に出征兵の家に桑摘みの手傳ひに行く事を定めた。

學校から歸ると地藏堂へ集つた。「皆んな、集つたかん。おや、又あの町の子出て來んのん？」と、庄吉は見廻して言つた。



「うん、わしが呼
びに行つても、出
て来やせん」

と、仁一が告げ
た。こうなると、
皆んなも日頃の不
満迄爆發させて言
ひ出した。

「大體、ひどいの
ん。一遍つだて並
んで、學校へ行き
やせん。」

「呼んでも、返事
もしやあせん
し。」

などと、

「よし、共同動作
をしない奴、殴つ
てやる！」
と、庄吉は怒つ

た。善太は慌て、
「待つとくれん、わしが呼んで来るか
らのん」

と、町の子の家へ走つて行つた。丁
度、小犬を抱いて庭に遊んで居た。

「来とくれんよ。桑摘みに……」

「……………」

「皆んなが怒つとるからのん……」

「……………」

善太がいくら頼んでも、一寸善太の
方を振向いたゞけで、来ようとしな
い。了ひには小犬を抱いて、奥へ入つ
てしまつた。

「どうしたん？」

善太の姿を見て、庄吉は尋ねた。

「お腹、痛いそうな……」

「そるか」

と、子供達は、さつさと桑摘みに出
掛けた。善太は、ほつとして、一緒に
歩いた。

(四)

「おい、待て!!」

庄吉は、町の子を呼び止めた。

「朝、どうして、一緒に並んで行かんのだ？」

五、六人の子供は圓りを取巻いて詰め寄つた。町の子は黙つて立つてゐる。

善太は驚いて駆けよつた。

「待つとくれん!! 庵主さんの今日の話忘れたかん。ほら——非常時だ、國の人は皆んな仲よく扶け合つて——と、聞いたづら？」

皆んな黙つた。と、其時、

「庵主さんだあ!!」

と、一人が叫ぶと皆んな逃げ散つて了つた。向ふの道角を曲つて庵主さんはお衣でこちらへ向つてやつていらつしやる。町の子はその姿を見ると、急に大きな聲で、ほんとにびつくりする程、大聲で泣き出した。善太も驚い

て、垣根を曲つて隠れた。そうと覗いてると、庵主さんは町の子をお衣の袖に抱いて送つて行かれた。

(五)

そんな事があつてから十日程して、學校で意外な事が起つた。それは、丁度一時間目の算術が終つた時、先生は町の子を招いて教壇に立たせると、改まつた口調で

「皆んなと四月以來、仲よく勉強し、

又遊んだ木村君が、お父さんの御都合で、退られる。みんな、木村君とお別

れするんだが、別れても日本の土地の内でお互ひに勉強するんだ。木村君も元氣で勉強するように、皆んなで祈り

ませう。——では、一同起立!!」

町の子に皆んな頭を下げた。少し淋しい氣がしたのだらう。皆んな眞面目に口唇を緊めてゐる。町の子は自分の席で荷物を片付けながら、そつと隣り

の善太を見た。善太は一寸笑つて見た。すると町の子もにつこり笑つた。荷物が出来上ると、も一度善太を見て笑つた。善太も……。

そして、ランドセルを肩に掛けて、出掛けるとき、

「君、これ、使つて呉れ給へ、」

と、あの十二本入りの色鉛筆箱を善太の机に載せて、

「さよなら!」

と、小さい聲で云つた。善太はびつくりして眼を見張つたが、丁寧に頭を下げた。もう町の子は教室を出て行つて了つた。善太は涙が流れて仕様がな

「さよなら!」

町の子の聲が耳に残つてゐる。

「やつぱり、善い子だつた。」

善太は、貰つた色鉛筆を、手にして、いつ迄も、いつ迄も、教室で、泣いて居た。

俳壇

大田 幸子



小樽市 福浦 江

藤の花にほひこぼれし芝生かな

評—横圖としては、ありふれてゐるが、

「句ひこぼれし」と云ふ中七字の表現

が、まことに鮮かなものである。所謂

葉紫の花が芝生に零れ落ちてゐる其の

ほとりでの作であらう。清々しい感じ

に満ちみちてゐる。

大阪市 正月 正 全

夏川を渉る嬉しさ手に草履

評—適々として夏川を渉つゝあるときの、

童心が手にとるやうにわかる。中七字

の「嬉しさ」で切つてゐる無難な表現

も、下五字の表現も此の童心を表は

すべく大いに投立つてゐる。清澄な透

瀟でもわたつてゐる事であらう。然

し、此の様に安易な表現の句は、多く

の場合失敗に終りがちなものであるこ

とを心せられたい。

シネマ街浴衣の人々も来てまじる

評—東京なら浅草を想像するやうなシネ

マ街。もうぼつ／＼夏らしくなつたと

感じ乍ら眺めてゐると、尖端でも切る

やうに浴衣を着た人がやつて来て雑踏

の中へ消えて行つた。「ホー」氣が早

いと思はず口吟んだであらう作者の

氣持が見てとれる。

何んでもない事柄でも感興さへ湧け

ば、句にすることの出来る良い一例で

ある。

下 關 野 公 孫

關門海底トンネル見學

昇降機若葉風より地の闇へ

東京 小山 靜 念

お遍路もともに田植のひるげかな

和歌山 奥村 映 水

女學生征家の田植にぎはして

米子市 宮本 白 十

青桐の蔭にひるげも女工たち

東京市 森 田 法 見

瀬に沿へばいつしか百合の山に來

ぬ

香川縣 日向 法 郎

灰皿の煙にふれて夏の風

高岡市 内山 泰 水

近づくといふ星涼し岬かな

大分縣 石堂 柑 山

齒の白き兵士集りて若葉影

關 木 閑 衣 乙 女

罌粟月夜蜂灯の町へ群れ行けり

鼓賀縣 重野 ふみ子

朝顔の明日咲く鉢をとりあぐる

靜岡縣 相馬 樂 人

芥子煙を日傘と犬と並びをり

前橋市 堀 深 全 益

龍臺の那落を衝いて轟ける

和歌山 岡本 一 浩

仁王尊のまなこの金に大旱

大阪府 日根野谷池三弘

童心にかへりし今日の歸省かな

中支連道 新田 正 治

哨兵の足元暗く螢飛ぶ

飯田市 古川 八重子

二の鳥居くゞりいよ／＼蟬時雨

栃木縣 大輪 雲 海

鮎釣りの前を遊船下りくる

大阪市 橋本 花 汀

亡友三浦君の論功行賞到る

名古屋 安 澤 喜 崎

蹴功を聞むうからに若葉風

名古屋 安 澤 喜 崎

噴水のしぶきにくらきひつじ草

横須賀海軍病院 泉 鳥 雲

遙かなる灯の新緑を哀しめる

横須市 小宮 雲 平

梅雨の月流れて蛙鳴きそへる

和歌山 竹中 八洲子

流れ落つ棚田の水や梅雨はる／＼

廣島市 小園 邦 香

片陰に憩ふパン屋の汗淋漓

小樽市 平井 善 慈

心頭ふれて下りぬ藤の花

名古屋 山田 隆 太郎

猫仰ぐとき燕やつぎ／＼に

大阪市 正月 正 全

すく／＼と竹の伸びるもつゆの雨

大阪府 廣村 坂 善 順

うた／＼ねを蚊にさ／＼れたる朝かな

小樽市 水室 宗 人

明月に向ひて落つる眠かな

香川縣 中 村 茂 舞

龍に一つのこりし螢はなしやる

山口縣 長 岡 見 智

金魚の疲れ見へけり水の色

小樽市 中 村 茂 舞

夏の月夜釣りの舟をてらしけり

小樽市 中 村 茂 舞

投稿規定

官製はがきにて二回二句以内
とし「淨土」編輯部併係
あて送ること

防人

魚尾晃久

鐘が鳴る。召集されて大陸の曠野に出で發つ若人。倉卒として内地を離れ戦火の埒場に我と我が體を抛げ込んで行く。出發に際して、親が妻子が友人が、夫々、異つた感激の情を以て送つてくれる。壯途に勇躍する若人の心象にも、それが最後となるだらう覺悟の決意が潜んでゐよう。かうした現象を、日露戦役に、將また日清戦役に記憶新たに追想することが出来るが、いま日本の歴史を繙いた時、千餘年以前の奈良朝時代に、その嚆矢を知ることが出来る。

誰らうとする防人がそれである。

彼等の職掌は兵士に徴せられて邊土を守

備することであつた。任期は三年、毎年二月がその交代期であつたが、臨時に徴集されて僻地に追はれるが如く派遣されもした。

水鳥の發ちの急ぎに父母に物言はず來て今ぞ悔しき

防人に立ちし朝けの金門出て手放れ惜し

み泣きし兒らはも

出發の忙しさにまぎれて、恩愛の父母に

一言も物を言はずに來てしまつた後悔と殘

念の情緒。離れば離れる程想ひ出される

のは兩親のことである。苦しいにつけ愉快

につけ、共に感情を分つて負擔してくれる

兩親にさへ碌々物を言はずに來てしまつ

た。果して防人は再會の機運に逢遇するかどうか。

また、防人として出立たうとする朝、妻は見送つて來てくれた。二人は堅く堅く手を握り合つたが、何時までもさうしてはゐられない。妻は離別の念に、餘りの名殘惜しさに涙を流してゐた。自分とても何でそれに負けよう。同じ心持だつたのだ。しかし、今思へば、さうして別れた妻は一體今頃どうしてゐることであらう。燃焼的な涙の追憶の情景である。

凡ゆる艱難と無聊に苦しむ防人のこの心情は、凡百の、現在時局下に呼吸する人々の經驗するところであらう。

× × ×

畏きや命か々ふり明日ゆりやかえがむた寝むいむ無しにして

大君の命かしこみ磯に阿りうの原渡る父母を置きて

最愛の妻を残してゆくことは必ずや氣が

かりになることの一つに違ひない。しかし、防人は命によつて軍に服するのである。従つて、明日からは共に語る感情の相手とは一緒ではない。寂しいことである。しかし、畏き勅を戴いて來た防人で、自分はある。全てが妻に對する別れ難さに支配され切らずに、君命を畏む責任感が潜んでゐる。複雑なる人間感情の義と情との衝突の機微をよく表現してゐる。しかし、さうした情趣は餘りに凡庸でもある。なぜならば、次の歌のやうに、磯の上に船を突きあてながら危い航海をしてゐる自分は、親を捨て身を顧みず、たゞ大君に盡すのである、と行く處まで行けば勃然と湧出する、沈痛にも類すべき悲壯感をもつてゐるのであるから。さればこそ、この防人を送り出す父母や妻子は、たゞに別離の悲嘆にのみ終始してゐられよう。今ならば、本質的には兎も角として、千人針が贈られ千社詣がなされるのと同じ様に、

家にして戀ひつゝあらずは汝が佩ける太刀になりても驚ひてしがも

と、防人に赴く若者の父は武運長久を願つてくれるのである。自分は、防人として出で發つお前を、たゞ家にゐて戀しく思ふよりは、寧ろ、お前が腰に着けて行く太刀となつて、出来ることならば、お前の身を離れずにお前と一緒に何處までも出掛けて行つて、そして君命によつて働くお前の身を護つてやりたいものだと思ふ。何と言ふ有難い心情ではないだらうか。一概に死をのみ欲するのが眞の英雄ではないであらう。さればこそ大死と言ふ辭もある筈である。防人の父はそれを、若人の最期を氣にしてゐるのである。この、眞情流露、切々胸を揺る情操は、人間である限り時代の今昔を問はず、正しく共通する、そして現時の多くの人々が経験しつゝある事である。

しかし、吾等はもう一步掘り下げて徹底

した態度を言葉の上に看取することが出来る。萬葉を讀む程の者の周知な、人口に膾炙した、

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御盾と出てたつわれは

と言ふのがそれである。自分は防人の火長として召集された。今日からは自分の體であつて自分の體ではなく、家のこと何のことも何も振り返らずに、たゞ大君の數ならぬ一兵卒として、出て行きます。身命ともに大君のために抛つて防人として興へられ、たその職責を果します。歡呼の聲に送られて出で立つ驍頭の勇士と何の變りもあらう。しかも火長と云へば十人の防人の長のことであるにも拘らず、自身を「醜の御盾」と卑下することによつて、自個に相對するものをより高めてゐるのである。誠にその言は懦夫をして奮起せしめ、消極的な態度を驅つて奮進せしめるに足るの概があるものである。



これは私が手がけてゐた解放者の話である文中彼とあるのはその解放者である。

天華一座で彼に似た男を發見してはつと思つた。勿論彼ではなかつた。が、その夜彼のことを思ひ出して、仲々寝つかれなかつた。彼が△△座の道具方をしてゐた時、出方連中の素人芝居があつた。その時彼は太閤記十

十次郎の行衛

安井圭虫子

段目の「十次郎」をやつたが、素晴らしい出来であつた。彼にどうしてあんな藝が出来るのか不思議であつた。何事にも一生懸命になれぬ、それで要領のいい、小器用さうで實は不細工で、女のやうにすぐ赤くなり、至つて小心者のやうに見えて實は仲々圖々しい横着な處があつた。目のクル／＼した色の白い才子風の小男で、和歌の眞似もやり文學も解するといった風で、若い女達にはもてさうな型の男であつた。本人は商業學校を卒業してゐるといふが嘘らしい。元〇〇私電の車掌をしてゐた時、業務横領で入所したのであつた。釋放されてから私と縁が結ばれた。幸ひある素封家の手代に雇はれる事になつ

た。こゝでうまく行けば彼は立派に更生が出来たのだが、どう云ふものか家族の人と感情がびつたりせず、まだ眞面目さの失はれない頃で彼もその事でひどく悩んでゐた。私は會ふ度に彼を慰めたり、激勵したりしたが——ある日境の某旅館から電報が來た、
「ゴシソクキトク、スグゴイ」
私の小供は小學校に通つてゐた、外に子供はない。がこの事業に關係してから、よく思ひがけない面倒がかゝり、思ひがけない手紙や電報を受取つたりすることもめづらしくはないので、この電報にもそれ程驚きはしなかつたが、「キトク」とあるので、そのまゝに

もしておけず、土曜の午後で金の準備に困つたが、漸く〇〇圓を懐中して機に急行した。

教へられた旅館の階段を上る中に彼であることを直感した。

薄暗い二階の六畳に打俯してうなづてゐる青年は果して彼であつた。女將は

『手當が早かつたので生命は大丈夫ださうです』

と私に囁いた。猫いらずを呑んだらしく、機ひがブンと鼻をつく。彼は私の来たことが解つたと見えて、苦しい中から微かに

『すみません……』と顔を伏せた。

『馬鹿な事をしたね、しつかりしてくれよ、何も心配はいらぬ萬事私が引受けたから、安心して早くよくなつてくれ』

私は叱る事を忘れて抱いてやりたい氣持になつて色々々激しくした、彼の目は感謝の涙で一杯であつた。

勝氣な女將は私が詫びるのを打消して

『死なれると困りますが、よくなつて頂けば私の家も祝ひ事です、なに蒲團の二枚や三枚は何でもありませんよ』といつてくれた。

枕邊にもう一人藝妓らしい女が座つてゐた。挨拶しやうともせずつましい手付で彼の頭を冷やしてゐた。後できけば別に彼がよ

んだのではなく、隣座敷に来て居たのが同情して附添ふて看護してゐるのだといふ事であつた、至つて無口なおとなしい女で

『お父さんにしては少し若過ぎると思ひました』といつて女將と見合つて笑つた外には何もいはなかつた。

運命のいたづらよ、それから六、七年後にふと新聞を見ると、此女將と此藝妓とが無理心中をやり猫入らずを呑んで女將一人死んだといふではないか、私は本當にびっくりした。此の二人は長い間同性愛であつたさうだ。が勝氣な女將は旅館が營業不振で困りぬいた結果無理心中となつたらしい、然し猫入らずを思ひ出させた事には私共にも責任があるやうに思へる。彼は恩人の彼女に猫入らずを教へて自分はピン／＼丈夫になり、そして、眞似た彼女は一人で寂しく逝つたのだ。

ありたけの金を残しておいて翌日機中毒で黄色くなつてゐる彼を抱いて汽船で松江に歸つた。

眞面目一式の彼の母は泣くに泣けぬ終るに經れないといつた顔付で蒲團をしいた。弱つてゐる彼を寝かせた。そして其夜は母と二人で枕邊で徹宵した。

そんな事から素封家からも解雇せられ半年餘は半病人で仕事らしい仕事は出来なかつた、何分見得坊の彼は體裁のいゝ事でない

とやらなので仲々適職が得られなかつた。こつそり提灯の袋張りや看板塗の手傳ひなどもやつた。彼は字が極めて下手であつたので提灯や看板の文字は私が書かされた。何分馴れぬのでどうもうまくのらぬ。今ではその頃書いた提灯や看板を見ることがあるが、本當に穴があれば入りたい思ひがする。

その頃は殆んど私の家で起居してゐた。世間の人には私の親類だといつて居たさうだ。私の手でどうも適當な仕事が見つからず、不費成ながらも彼の遠縁のものがやつてゐるある縁業の帳面付けをやることになつた。と

つた。

眞面目一式の彼の母は泣くに泣けぬ終るに經れないといつた顔付で蒲團をしいた。弱つてゐる彼を寝かせた。そして其夜は母と二人で枕邊で徹宵した。

そんな事から素封家からも解雇せられ半年餘は半病人で仕事らしい仕事は出来なかつた、何分見得坊の彼は體裁のいゝ事でない

とやらなので仲々適職が得られなかつた。こつそり提灯の袋張りや看板塗の手傳ひなどもやつた。彼は字が極めて下手であつたので提灯や看板の文字は私が書かされた。何分馴れぬのでどうもうまくのらぬ。今ではその頃書いた提灯や看板を見ることがあるが、本當に穴があれば入りたい思ひがする。

朝の歌

黒き戸張は 地におちて
恵みの露に 夜は明けぬ
我らもみ露 身にうけて
今日も安けく 通さなん
幸ある佛 恵みのみ親
我行く限り 守らせ給へ

妙えなる雲間 遠しくも
救ひの光り 出でましぬ
吾等も聞え 打ちのけて
今日の勤めに 向はなん
尊き佛 光のみ親
我なす限り 慕きたまへ

ころが半年たゝぬ中に、またも刑務所の門をくぐる事になつて了つた。

次に釋放されてからはもう何でもやる氣になつてゐた。色々やつたあげく、前述の△△

座の道具方が一番本人の氣に入つたらしい。いゝ加減にごまかせる仕事の好きな彼に適してゐたのかもしれない。無智な人達の中で所謂インテリとして相當勢振りを利せてゐた。その頃上述の素人芝居があつて、一段と彼の人氣があがつた譯だ。然しそれが彼の行狀を悪化させたらしい。私の家へ来る度數が次第に減じて行つた。

結局私の托した某社への手紙を懷ろにしたまゝ行衛不明になつた。

眞面目一方の彼の母は私にすまぬと云つて、それ以來私の家に来なくなつた。唯時折恩を忘れぬつもりか、果物などを店から持たせてよこしたことがある。

彼からはその後一回もたよりがない。

市役所や刑務所を調査して見ても彼が再び刑務所へは入つてゐないやうだし、又死んでもゐないやうだ。

朝鮮にゐるか、滿洲にゐるか、或ひはどこかで、田舎廻りの一座にでも入つて「十次郎」でもやつてゐるのか

『あれ程になつたのにたより一つよこさぬつて、ひどい男ですね』
と事情を知つてゐる人が云ふのに、私はいつても答へてゐる。

『多分成功してからと思つてゐたのが、うまく行かないのでせう。』

可哀さうなのは彼の母親だ。襦袢から貰つて、苦しい中で世間から笑はれる程甘へさせて育てあげて結局こんな目にあつたのだ。笑ふことも忘れてしまつた様な顔になるのも當然だ。

彼女は今も病院などに雇はれて、汚物の世話などをして細々生活してゐるさうだ。それでも、成功した彼がヒョッコリ歸つて來るのではないかと云つた淡い夢を抱いてゐるかどうか――。

先日街角でチラと彼女を見た。そしてその髪が眞白になつてゐるのに驚いた。彼女の臨終には私が代つて死水をとつてやりたいと思つてゐる。(筆者は浄土宗主事、松江保護會の常務理事として二十年前免囚保護に盡力)

今の世の不思議

滋賀 一 讀 女

さみだれの頃、心も何となく顯
りがちの折からにも拘らず諸先生
方にも御聖志に御勇躍のほど數な
らぬ私もひたすらお喜び申してお
ります。毎月二十日後となります
と淨土の配達されるのを待ちかね
ております。本月の和田先生の數
の中の佛様の記事を拜見してすべ
ては和田先生始め御家族方の御信
仰とその御人格の依つてしからし
むるところとは思ひながらも今の
世の中にも不思議な事のあるもの
と感激のあまり、再三繰り返し拜
讀いたしました。毎度先生のお記
事を拜讀する度に病める時先生に

病床の慰めをうける人々の幸福な
ることを思ふては涙にくれており
ます。私などはせめて諸先生の有
益なる尊い御執筆を拜讀させて頂
けるだけでも我宿縁を喜び法悦に
只感謝してお念佛にいそしみ居り
ます。尙今後益々諸先生の御指
導のほど御願申上ます。

なむあみだぶ

蟹江八年坊作

なむあみだ佛と稱ふ朝ぼらけ靜
かなりける心なりけり
なむあみだ佛と云ふも外ならず
唯南無阿彌と稱ふなりけり
なむあみだ佛の心知りぬればみ
な何事も恵みなりける
なむあみだ佛を知りて十年の長
き病も安くおくりぬ

なむあみだ佛の御名を稱えつゝ
寫經するをも樂しかりけり
なむあみだ佛の心偈びつゝ櫻の

花の散るを見るかな

なむあみだ佛を求む苦るしみは

また樂しみと變りゆくなり

なむあみだ佛に向ふ心には何時

ぞや知らねよろこびの湧く

なむあみだ佛に捧ぐみあかしも

思えば吾れの油なりけり

なむあみだ佛を得ればありがた

し唯ありがたし今日ぞ此の身を

なむあみだ佛え國のみ柱となれ

るますらを祈る朝かな

なむあみだ佛え白衣ますらをの

いたで癒ゆるを祈り居るらむ

なむあみだ佛ぞ尊とありがたし

天のまに／＼居ますなりけり

拜讀淨土感想

新谷 諦順

却濁塵寰有閃明 誰知淨土易修行
宣哉一宗開門戶 雜誌文章天下鳴
佛教多岐放異彩 虎屍只規假相盛
源空卓見遺風起 愛讀諸君飢渴盈

且夕珍重耿味覺 深欽仰愈到更正

現世浮沈非繫念 觀音勢至豈交情

傳家血脈輝遐代 承繼同胞弟與兄

裸體出生裸體歸 古今一轍更無違

休言貧富如長短 念々聲々補弊衣

○ 如是我聞淨土門 妄塵雜起非今論

彌陀一向無餘念 單信稱名道氣存

○ 凡夫醜劣顯真相 博學多才捨錦裝

願海投身咄十惡 一心不亂法然房

・ 已 上

大膽な編輯を

京都 念佛 居士

酷暑の折諸先生の御奮闘多謝、
最近の淨土稍小ちんまりと纏りす
ぎる感あり。もつと繪や寫眞をふ
やし、實話を豊富にして欲しい。
もつと大膽なる編輯をのぞむ。教
界一の大雜誌なれば、敢へて苦言
を呈し、一段の躍進を望む。





供養

淨友會施餓鬼に隨喜して

川端 祐 輔

目蓮の母

母が亡くなつてからもう十五年も経つた。然し母の想ひ出は年と共に新しく、お盆が近づくと胸のうづくのを覚える。

目蓮尊者の母親は、目蓮を殊に他慈しんだ。隣り近所の子供等が、立派な着物を着たり、うまいものを食べてゐたりするのを見て、母親は何とかしてそれ以上のものを目蓮に與へてよるこばせたいと心はあせるのであつた。

目蓮の母は目蓮が可愛しくて仕

方がないのである。他人の子が物にふれ、事に當つて、目障りになり、より以上のものへと欲望をそられるのをどうする事も出来なかつた。

貧乏な世帯を切り廻しながら、心を千々に碎いて我が子のみすばらしい姿に涙し、不自由な境遇をかこちなやんでをられた。

目蓮も、母の慈愛深い心をどの様にかうれしく、心に感じた事であつたらう。

それから幾歳か経た。

目蓮はお釋迦様の弟子として立

派な僧侶になつてゐた。

なつかしい母の事とて、一日として忘れる事もなかつたのであるが、或日靜かに想をこらし、得意の神通力で、故郷の母を尋ねてみると、已にこの世の人でなく、而も地獄の苦しみに沈んでをられた。

母のなした罪は皆自分を思ふ欲望の故である事を知つた目蓮の悲しみはどんなであつたらう。

お釋迦様にこの苦衷を訴へて、始めて罪の償ひとして、なされたのが施餓鬼供養であつた。……

私の母はよくこの様な話を、幼い私にしてくれた。母は、私の事に關しては、目蓮の母以上であつたかも知れないと思ふ。その様な事を想ひ起しては母にすまないといつも胸がいたくなる。目蓮の様な神通力のない私には母が今どんな苦しみをしてゐるか、楽しい蓮のうてなにあるのか皆目分らない。而し、私たち子供らと別れて住み淋しみは如何様にしても斷ち難い苦しみであらう。

亡き人々の爲に

今年も又お盆が來た。私は母が口ぐせの様に、一人出家すれば九族天に生れると言ふ諺を引例してすゝめるので、亡くなつた直後遺志を守つて出家したのだが、母に法話を聞かせられてゐた頃より却つて無信仰な状態になつた事を

感ずる。

すまない事だと思ひながら、どうする事も出来ない。お經を誦しながらあらぬ反省を試みたり、讀經を無意味に感じたり、罪深い日々を送つてゐる。

而しお盆の行事だけは、何かしらしみりと未來世を憶念するよるこびの中に迎へる事が出来る。そして親戚知友の亡き人々への追憶を共になつかしめるゆかしい心境に立ちかへりうる事を惡業深い私自身への唯一のなぐさめとしてゐる。

今は亡き人々の爲に、私は感傷であるかもしれぬがうづく心の中で祈念回向する。

— 淨友會のお施餓鬼に —

七月三日、今年始めてのお施餓鬼を私は本郷淨友會支部に随喜

した。

中村辨康先生始め中村康隆師、千葉寛定師らの顔も見えた。莊嚴された施餓鬼壇の上に幾百本の卒塔婆がある。會員諸氏の亡き人々の戒名であらう。私も、私の母の戒名を心に誦した。

會衆一同の心に一脈通ずるよるこびと淋しみの感情が交錯してゐるのを私は心をときめかしつゝ感受する事が出来た。

笑みをふくんだ橋本女史の顔も今日は一筋の追憶の涙がにじんでゐる様に見える。靈岸島の綾部さんはつひこの間迄元氣で活躍してゐた御主人にぼつくりゆかれ涙もかわかぬ折である。主人が急に亡くなつてみれば、後が借財ばかりで家邸までが人手に渡つてゐる始末で泣くなかれぬ運命をかこちながらも亡き御主人への切々の情

が深くきざまれてゐる。然し流石信仰に徹まれた過去の經歷は『物に捕はれてゐたあさましい自分に氣がつきまして、漸く最近氣が樂になりましたと淋しくほゝえむ。

江角金一郎氏の緊張した顔も最前列に見える。奥さんを亡くされたのはこの春であつたと思ふ。『あの世で必ず再會出来るでせうか』と眞剣に中村先生にたゞしてゐたいつかの座談會の結果を想ふ。

原田さん、鳴海さん、石川さん、吉田さん溝口さんなど三十名の御常連のお顔も、今日は々々夫おくゆかしく見える。

亡き人々への冥福を祈り淨土の再會疑ひなしと信じて施餓鬼會法要を厳修してゐる姿こそ、人間の至情である様に思へる。

力強い中村先生の施餓鬼會疏が終つて、破獄『若人欲了知』が始

る。私はこの文もふしも好きである。『一切唯心造』の文句を今更の様に泌々と反省してみるのである。

お坊さん等はお盆は何につけても多忙過ぎて過勞である。お盆が来た！と言ふ歎聲をさへきく事もある。

而し人々のこうした至情を感じるとき、私は出家として信者の方々と心からうちとけられる様な柔和なよろこびに充たされる。

今年は大陸に骨をくだいた幾萬かの英靈がある。私ごとのみに徒になやんではいけないと思ふ。施餓鬼會法要の機會に三界萬靈に對して麗しい心の華をたむけたい。

x x x

名 利
めぐり

不動尊と祐天上人



不動尊と云へば成田と云ふほど、成田と不動様は人々に膾炙したものであるが、實は群馬縣館林善導寺にある安置された不動尊こそ祐天上人が開悟を得た當の不動尊であると云ふことである。(カットは同寺山門)

今、館林善導寺に藏せられてゐる「願成出世不動尊縁起實錄」を見ると、

當山三十五世の檀通上人の實弟祐天大僧正幼時入門のみぎり、魯鈍で經を誦すること能はず、深くこれを恥じ、即ち天にうつたへ、地に哭し、當山不動尊に祈ること三七日、満願におよびて寶劔を授り、毒をはき、こゝに憶持不忘の大利をえて、つひに緣山第三十六世の大僧正に補せらるゝとあり、

爾來、願成出世不動の名遠近に聞ゆと書き残されてゐる。

この時祐天上人が吐血した衣、寶劔なども當寺の寶物として残されてゐる。

いま、成田の不動尊と祐天上人との關係は下總生實の大嚴寺開山道譽上人の成田に祈りし事蹟と混同するもの

だそうであつて、これを祐天上人に附會せしめたのは同じく「實錄」によると

洞庭湖上の雁

人見部隊 安田 秀賢

征旅一年有七ヶ月、此處岳陽洞庭湖畔の地區附近の警備について約〇月、戰塵にまみれた軍衣にも漸く家郷を思ふの日の多くなつた。

かの戰史に有名な上杉謙信が能越二ヶ國を合し得て、月明山上に宴を催し、數行の雁の行衛を見て征途郷愁を偲んだのもものふの奥ゆかしき餘韻を示したもので、心もとない寂愁と笑ふこと勿れだ。

思へば昨々年の秋、宇品の港を出發して波荒い玄海のしぶきに故郷にある母や子や妻の影像をふるひ落して、上海〇〇碇泊場に下船未だ戰花に血塗られた上海の町を通つて眞如無電臺に初の陣營の露營の夢を結び、曉明敵機襲來に夢破れて、敵屍累々たる蘇州河の渡河をしてから〇〇鎮に在る本隊に合し、南京追擊戰を初戰として今日まで我れ乍ら不思議に生命を完ふしたものと思ふ。

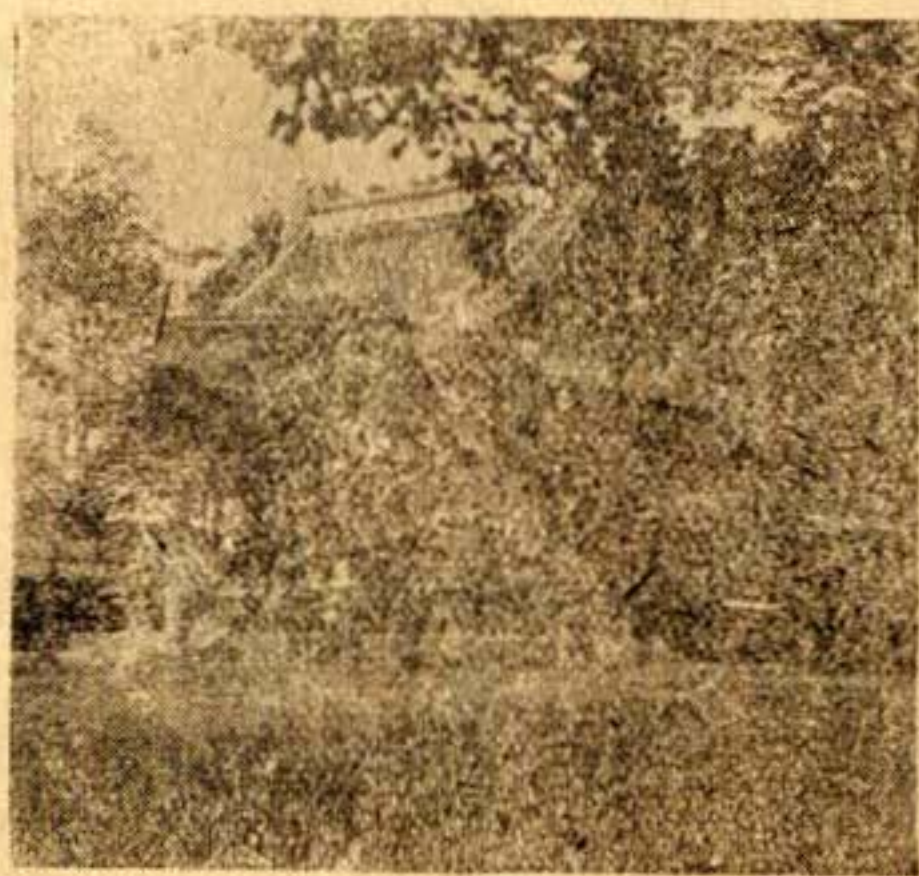
當時成田の役僧某、道譽上人の名甚だ揚らざるに反し、祐天上人の事蹟奇特多く、且つ道名一世に高きを見て名をかりて不動利生の程を知らしめんことを大僧正の懇請せしに、そは衆生濟度の方便なれば苦しからずと允し給ふ

と云ふ譯で、成田山が祐天記なぞを作つて宣傳したために「一般人は祐天の利生成田なりとするに致」つたとあるが、本尊はこちらである云ふのが善導寺の主張である。

その他にもこの善導寺の不動尊に就いては数々の物語りがあるが、中にも南了上人の逸話は色々の示唆を含んで面白。

當山第四十一世圓理上人の弟子南了なるものが天性闇愚の上に訥辯であつたので、法門論議あるごとに恥辱をうけ、無念に思つてゐたが、ふと祐天上人の事蹟を聞き、これにならつて祈願を籠めたところ、同じく大願成就し、知眼ひらけて、ある日の法筵に大衆の面前で大いに面目をほどこした。ところがそれから幾日もたぬうちに行衛が知れなくなつ

たので、一山大衆八方手をつくして搜索したところが、その居室の文庫中に遺書がしたゝめてあつて「不動尊の利益顯著して予其の慈悲哀愍にして法門に大利を得たれば、今は既に望むところなし、三門外中の井戸に捨身往



生すべし、これこの不動尊の利益のほどを遍く世に知らしめんがためなり」とあつたのでその井戸の上に不動尊を遷座して今にいたつてゐると云ふ。享保十年三月のことであつたと。(寫眞は不動尊堂)

うす露の未明の光のうちに千古の歴史を秘めた揚子江の流れが、果ても知れぬ廣々とした洞庭湖の中に入り、渦紋を畫きつゝある水流を見て、今は亡き戦友の影をしのべば、戎衣の袖が涙にぬれる。千仞の山谷に、峻劍峨々とした山嶺に、泥濘の路の上に、この父、あの夫、兄や弟は背をあけて覆れていつたのだ。支那の大地に吸ひ込まれた戦友の幽魂を思ふ時、たゞ感慨胸に迫るのみ。

昨日の夕暮、六十餘歳の養母から便りがあつた。細々としたその手跡のあとを見て何かしら胸のつまるのを覺へた。宏莊寂寥とした寺院にわが子の歸りを待つ母、戦雲漂ふ露營の假寝のひとゝきに、母安かれと祈る子の心、人生の至心これに過ぐるもの無いではなからうか。

昨日も今日も湖上を遙かに飛んで行く雁の姿を見る。あの一列横隊に美しく並んで渡る雁を見て、東洋平和の氣運が漸々として迫ってくるやうに思ふ。それで在つてこそ私等陣營に生きるものゝ尊さがはつきりと意識出来る。

眞仰運動ニユース

東北・北
海道巡錫
いよく本決り

八月上旬より一ヶ月

各地に法然鑽仰の大旗を掲ぐ

兼ねて計畫中の本部員の東北・北海道巡錫はいよく八月五日東京發花巻を振出しに左の如き巡路で同月末まで各地に巡錫、別時念佛會、講演會、座談會等を催して法然上人の遺徳宣揚の大旗を北海の地にかゝげることゝなつた。

八月六日花巻廣隆寺、別時會、講話八日函館稱名寺、講演會並座談會、九日江差金剛寺、講演會及座談會(晝夜)、十日江差阿彌陀寺、十一日登別、十二日上川、十三日美幌、十四日川湯、十五日旭川、十六日より廿日迄小樽七ヶ寺(天上寺、直行寺、願雄

寺、無量壽寺、長昌寺、淨土寺一行は中村辨康、佐藤賢順、川端祐輔の三氏で八月廿一日小樽より歸途につく豫定。

台北支部

田村智學氏の

献金

臺北支部は百餘の會員を擁して極めて活潑に活動を續けてゐたが今回同支部主任田村智學氏は本部活動費の一助にと進んで五十圓を献金せられた。

本部だより



◇本部のすぐ裏が芝公園のプールなので、毎日大小のカッパ連がキヤードブン／＼ジャブ／＼と大變な騒ぎ、酷暑にうだつてゐる身には相當こたへます。某君やせ我慢の辯に曰く「戦地で重砲聲を聞きながら仕事をするとと思へば我慢出来らア」と。

◇編輯の東君南支の第一戦で活躍中病を得ていよく九州の小倉の陸軍病院に後送されて来た「もう身體も良くなつたんだが残念だ」とたよりをよ越す。◇運筆の故を以ていつも編輯子にかんしやくを起さる佐藤賢順主事、今回の東北・北海道巡錫には良い土産話を澤山執筆すると誓約、違約の出来ない様に誌上發表しておく。

會員の先亡を弔つて

淨き友の會の施餓鬼會

七月三日午後三時半より本郷淨き友の會支部では、支部會員五十名の先亡諸精靈の追善供養並びに支那事變戦死病死者の追弔施餓鬼會を厳修した。

導師中村辨康師を始め、中村康隆、川端祐輔、千葉實定、嶋澤信の諸師、並びに會員四十二名打ち集ひ、支部施餓鬼會の始めての試

みとしては意義ある結果をおさめた。

五時半法要終了夕食休憩後、お盆の話、中村康隆師、お施餓鬼の話並阿彌陀經講、中村辨康師の法話あり座談會に入つた。尚淨友會例會も暫く暑中休みをするので、會員一同名残惜しげに十時散會した。

本會理事江藤、木村師ら 大陸より歸る

宗務所樓上で報告會

開教調査並びに英靈回向のため
に中南北支を巡回して來た淨土宗
大陸調査團の一行各氏は大陸の日
支人に與へた深い感銘と佛教徒の
今後の活躍に有益な調査資料を土

本會理事 矢島春道氏赴く

本會理事で淨土宗庶務課長の
要職にあつた矢島春道氏は、兼
ねて糖尿病のため病氣療養中の
ところ七月八日遂ひに遷化され
た。かつて遠く布哇にまで布教
活躍され淨土宗の有力な幹部た
る師の遷化は各方面からいたく
惜まれてゐる。因みに葬儀は駒
込専修院で大島大僧正導師のも
とに宗門の諸名士參集盛大に嚴
修された。

産として六月下旬それ〴〵使命を
果して歸國、七月八日淨土宗務所
樓上でその報告會が開かれた。
本會理事里見執綱、江藤、木村兩
部長を始め四十餘名の幹部出席の
上、江藤、長谷川、川添、大村、
福田各師の報告があり、大陸の宗
教事情、今後の對策等が熱心に討
議せられた後、現地の映畫を公開
し盛會裡に會を閉じた。

小樽市直行寺

支部内淨友會

六月三日、直行寺支部長、野村
性譽師におかれては、満七十七の
賀壽に當り、日頃御指導を頂き
し、お弟子並に法類御一同三十有
餘名、會堂し二日夕刻より三日に

わたり、御前ご指導下に、源平時
代に行はれしと傳ふる、千僧供養
大施餓鬼會。觀音、地藏、兩大士
報恩祭、總檀家先祖慰靈祭、を奏
樂稚兒練供養付にて盛大に執行す
るに當り、婦人會と共に出席し、
長期建設の聖戰時局下祖先敬崇の
念を、大に涵養し銃後に處する。
山内の新緑に「清風時發出三音
聲一微妙宮商自然相和」し宛然、莊
嚴なる極樂淨土の感ありき。南無
阿彌陀佛々々々々々

例會案内

○本會婦人部例會

八月五日午後一時より
芝公園明照會館樓上にて
(市電増上寺前下車プール隣)

○淨き友の會、及び良忠寺支部例會

會は今日は休みます。
各地支部の例會は本誌に發表し
ますから、日時場所を本部まで御
報告下さる様お願いしておきます。

陸海軍病院慰問 「淨土」寄附者芳名

- | | | |
|-----------------|--------------|------|
| 拾圓也 | 神戸市港區楠町 | 安養寺 |
| 一圓也 | 滿洲奉天省西安縣 | 西安寺 |
| 一圓也 | 滋賀縣水口町 | 永福寺 |
| 拾參圓也 | 京都市智恵光院下立賣上ル | 昌福寺 |
| 一圓也 | 郡山市 | 善導寺 |
| 一圓也 | 滿洲本溪湖滿洲興業銀行内 | 大石忠 |
| 一圓也 | 愛知縣舉母町 | 臨田大山 |
| 拾圓也 | 東京芝城南組 | 榮壽寺 |
| ○陸海軍病院慰問用「淨土」寄附 | | |
| 金も今日迄に既に總額四千圓に達 | | |
| し傷病兵慰問に大きな役割を果し | | |
| つゝあり、白衣の勇士からの感謝 | | |
| 状も多數頂戴いたし、中には自ら | | |
| 進んで支部を組織した方もありま | | |
| す。表紙うらの廣告御參照の上奮 | | |
| つて御應募の程お願い申します。 | | |

一枚起證文説約

藤澤 尙 綱

序 言

此の説約は、去る大正六年十一月に法の友體谷某より佛光寺御門主藏信曉師の書かれたる一枚起請文講話（上中下三卷）を借覽したのが動機となつて、其書を中心として元祖黒谷傳や淨土宗綱要等を参照して稿を起しましたが、元と眞宗高僧の書でありますから、その講話の適否が判明しませんので、豫て私淑する望月信享師に一應檢閲を願ひました。處が、師は眞宗僧の講話本に據つて淨土宗の

一枚起請文を註釋することは——譬へば英國憲法の註釋本に據つて日本の憲法を講述する類であるから適當とはいへぬとて、法然上人全集中の一枚起請文に關する一部をお貸し下されて、之れを一讀して更に稿を改めよと懇切にお諭し下されました。直ちに通讀しました。其の記録は何れも結構でありましたが、就中通俗的で解し易く適切と思はれる法嚴的門の一枚起請講説（上下二卷）を熟讀しました、

此の講説と彼の講話とを對照し

まして、大いに前稿を加除訂正して最も簡約に述べること致しました。題號に説約の二字を添へましたのは此の所以であります。大正六年一月に完結しましたが、爾來私かに篋底に秘めておいたのであります。それでは小乗的で他を利することはないから、世間に發表して多少世人に念佛往生の信念を温めてもらはうと思つて本誌に投稿することにしました。しかし當時短時日の間に脱稿したものでありますから尙ほ誤謬が往々あらうと思ひます。

をさとりて申念佛にもあらず、唯往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申て、疑なく往生するぞとおもひとりて申外には別の子細候はず、但し三心四修と申事の候はみな決定して、南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふ内にこもり候なり、此外におくふかき事を存せば、二尊のあはれみにはつれ本願にもれ候へし念佛を信せん人はたとひ一代の法をよくく學すとも一文不知の偷鈍の身になして尼入道の無智の輩に同して智者のふるまひをせずして唯一向に念佛すべし

爲證以兩手印

一枚起請文

もろこし我朝にもろくの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念の心

淨土宗の安心起行此一紙に至極せり瀝空が所存此外に全く別義を存せず滅後の邪義を防がん爲めに所存を記し畢

建曆二年正月二十三日

源空御判

一枚起請文題號釋

題は一部の總標なればうち見るより早、是は何事を記せる書と云ふことが顯はれるものであります。

これ題名を置く所詮であります。

世の智慧ある者も無知な者も一枚起請文とだに聞けば直に念佛の安心を示し玉へる法然上人の御遺訓であること知らぬものはありません。是れ即ち上人の御徳の顯はれたるもので尤もかくあるべき理であります。是れより聊か題號の釋を辯じませう。

一枚起請とは唯紙一枚の起請といふことで、大事の法門と御聖言と離れぬやう組合せのない一枚であります。起請の起の字は起動に

て起し動かすこととあります。請

の字は勸請にて請待することとあります。即ち佛菩薩諸天善神を常に在ます御座所より起し動かして、誓詞の席に勸請して證據人に立ちたまはれと誓ふのを起動勸請の起請といふのであります。其

の誓詞を書に記すを起請文と云ひます。起請は最も大切のことであつて假初になすことではありません。然るに上人が此の起請に及び玉ふたことは、衆生の出離一大事の爲めであるからかく誓言に及び玉ふたのであります。

故に此の一枚起請文は、天にも地にもかへがたき後世永劫の一大事、此上なき御誓言なりと仰ぎ頂かねばなりません。これで題號釋を終る。

狂雲集下（一休の號）に紫野一休禪師讀法然上人偈が出て居りま

す。因みに左に擧載いたします。

法然傳聞生如來 安座蓮華上品臺 教下智者 如中尼入道 一枚起請最奇哉

と、然るを人、首句を傳聞法然生如來と云ふ。

これをざつと解釋すれば、元祖法然より傳へ聞けば別に活如來があつて蓮華上品の臺に安坐し玉ふ活如來現在西方の阿彌陀佛を指す、元祖にはあらず、彼の佛を念じて往生を願ふにはたとひ一代藏經をよく／＼學び得たる智者であるとも尼入道の無智の輩に同じて念佛往生せよと勸み玉ふ一枚起請文は最も奇特なものじゃ、といふこととあります。傳聞法然生如來とすれば法然上人を指して活如來と云ふこととなります故何の味も無き句となつて大いに語脈を失

ふこととなります。誰れ一人かく誤りを傳へたのでありませう。今爰に辯じて禪師の讚嘆せられたる意が徒説ではないことを紹介しておきます。

本文の解釋

此の本文はおのづから五段に分れてをります。

初には、本願の念佛にまぎれたる念佛を簡ひ除かせられ

次には 本願念佛の正義をあかしたまひ

三には 疑難をさきに通釋しておかれ

四には 誓言を立てさせられ

五には 深心の機を定めたまへり

もろこし我朝にもろ／＼の智

者達の沙汰し申さるゝ觀念の
念にもあらず、又學問をして
念の心をさととりて申念佛にも
あらず。

これが初段にて、念佛のまぎれ
を拂ひたまふたのであります。「ま

づゝもろこし」とは、からのこと
で本名は震旦とも支那とも云ふ、

むかし日本へ文字や織物薬種又は
彌陀釋迦藥師の三尊像或は天文曆

法の類などもろくの物を送りお
越したるゆゑに、もろこし(諸越)

といふのであります。我朝とはい
ふまでもなく日本の事でありま

す。朝は君にまみゆるの總稱であ
ります。

何故に震旦、日本のみを擧げて
天竺(印度)をはぶき玉ふぞといふ

に、天竺は佛の生國にして其源
となる故、本願念佛を觀念といふ

誤りはありません。

故に天竺を省きて、本願の梵本
を中華(支那)の文字にて十念と
翻譯してより後に、種名を觀念と
いふの謬りは發ることであるか
ら、もろこし我朝のみを擧げ玉ふ
たのであります。

「もろ／＼の智者達の沙汰し申さ
るゝ」もろ／＼とは諸の字にて一

に非ずと註して數多のことであり
ます。沙汰はゆりそろゆるといふ

意にて物をゑり分けて悪しきを捨
て善きを取るといふ義でありま

す。「智者達」とは和漢兩朝におけ
る智者博學者であつて而も念佛

を弘通して釋文を著し玉ふたる多
くの人師を指していふのでありま

す。されば和漢兩朝の智者達の口
稱は劣ると捨て觀念義解の念佛は

勝れたりと取られたるは誤りで
あると拂ひ玉ふの義であります。

夫れ阿彌陀佛の本願は口稱念佛で

あるといふことは善導大師より開

けて其餘和漢の智者達は此の分別

がないから觀念は勝れ口稱は劣る

と思ふたのであります。是に就て

も本願の正義は口稱の念佛と云ふ

ことを聞き得たる人は等閑に思ふ

てはならず歡喜稱名すべきであり

ます。「念の心をさととりて」とある

は解了の義にて念佛には此の如き

道理あり此の如き大徳ありと理解

するを義解念佛といふのでありま

す。かゝる義解を拂ひ玉ふといふ

は若し名號の義理を了解せずして

唯念佛する計りでは往生せずと思

ふと拂ひ玉ふのであります。

夫れ彌陀如來の本願は諸佛超世

の大悲より本爲凡夫兼爲聖人と

て尤も不學文盲なる者を目的と

して建て給へる本願に、何ぞ義

解念佛を誓ひ給はんや故に大師

たゞ今彌陀如來本願の意はかく

の如くさとれとには非ずたゞ深

く信心をいたしてとなふる者を

迎へんとなりとの玉へるにて知

ることが出来ます。これ上人

は本願念佛は口稱にして觀念に

も非ず理解でも無いと古來の誤

りを拂ひ給ふたのであります。

あみだぶといふよりほかはつのくにの

なにはのこともあしかりぬべし



佛ほとけの光ひかりに照てらされて

日常勤行式解説

中村 辨 康

(二一) 攝盆文

(まごころこめて如來の光明を仰ぎつゝ)

光明遍照 十方世界
念佛衆生 攝取不捨

(觀無量壽經第九觀の一節)

(國譯)

光明は遍く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。

(意譯)

如來様の無量無邊の一一の光明は、遍く十方無量の世界を照らして到らざるくまもなく、一切は其大光明大恩籠の中にはぐくまれ

養はれて居りますが、別けても其根元たる如來様を念じ如來様の御名を呼んで欣慕し奉つる人達を攝め取つて捨てて離さず、しつかりと抱いて居て下さいますことは、本當に有り難い極みでございます。

(備考)

「如來の」三字を頭に加へ十方の次へ「の」の一字を加へて「如來の光明は遍く十方の世界を照らして云云」と唱へる人もあるが、法式協會では協議の結果誦讀を一定する必要上さうしない事に決定した。

また此「攝盆文」の前に法然上人の「法語」若しくは善導大師の「發願文」などを唱へることにもなつて居るが、それはまた別に解説をなさねばならぬことで、今茲で簡單に話をしても意も盡されないし何うかと思はれるので、之を割愛することにした。

講 贊

本勤行式も段々と味つて來たことに依て、今は遂に念佛せざるを得ないまでに導かれてしまつた。私達は、茲に改めて如來の光明を仰ぎ見て、心から深く喜ばずには居れないのである、

如來の光明は到らざるところなく、一切の森羅萬象の中に輝いて居て下さる。青きは青きまゝに、赤きは赤きまゝに、黄色は黄色のまゝに白きは白きまゝに、皆な其まゝに照り輝いて、私達の人生を豊かならしめて居る。鳥の聲も工場の雜音も皆な如來光明の顯現ならざるはない。煤けた破れ障子の紙にも赤茶けたボロ壺の上にも如來の光明は熾然として輝いて居るのである。

太陽の光ばかりが光ではない。燈火の明りばかりが明りではない。寧ろ其太陽も其燈火も如來光明の一部分でしかないのである。

イヤ闇の中にさへ如來の光明は輝いて居るのである。闇其ものさへも如來の光明なのである。一杯の水も一椀の飯も皆な如來の光明其ものなのである。

此故に如來の光明は天地に滿ち充ちてあらざるところなく、實に言葉通りに「十方世界を遍照し」て居るのであるが、信仰なき者にはそれが判らなく、唯だ森羅萬象は人間が享用するやうに出來て居るのだとぐらゐに、ぼんやり思つて居るだけなのである。こんな間當りな事はない。こんな愚知らずの事はない。私達は頭の頂邊から

足の爪先に至るまで悉く天地の恩恵の集積なのである。試みに數へて見ても先づ太陽がなければ生きられないのである。空氣がなければ生きられないのである。水がなければ生きられないのである。食物がなければ生きられないのである。大地がなければ生きられないのである。社會がなければ生きられないのである。國家がなければ生きられないのである。生物がなければ生きられないのである。礦物がなければ生きられないのである。其他天地間のありとあらゆるものは皆な私達人間を生かす爲に措しむところなく其全分を提供して居て呉れるのである。イヤ私一人を生かす爲に他の人達も一緒に居て呉れるのでさへある。若し天地間に自分一人だけであつたら何うであらう。乾度生きては居られないに相違ないのである。だから私達一生の間に展開される惡も善も災害も幸福も一切合切私達の生活を豊富ならしめる爲の恩寵なのである。

人々は災害を悲み苦しむそれからのがれやうともがく。無論誰だつてさうあるべきだが、人間萬事何事も偶然と云ふことはない。あるべくしてあるのであるから、そのよつて來たところの原因并に條件がなくてはならぬ。つまり子供が親からしかられるのは子供の方に叱られる行爲があり、其行爲に依る影響の大なるものがあるからである。然かも其親の叱責は、親心の愛の現れである。天地の大法は此理をはづれるものではない。だから天地の子であり如來の子である私達の上に現はれる一切の事象は悉く天地の愛の現はれで

なければならぬ。然もその災ひまでをも恩寵と見得る人こそ最も幸福な人であると云はねばならぬ。

こんな理窟はともかく此恩寵こそはまさしく如來の慈光である。如來大悲の光明である。然るに私達はこの恩寵になれ過ぎて平氣になつて居るのである。私達はさしづめ道樂息子と同じものである。親の多大な心配も絶大な苦痛も少しも知らずに平氣で親不孝を續けて居るのと同様である。何と云ふ罰當りなことであらうか。

如來の光明は超日月光であり無礙光であり無邊光である。或る反宗教の人が嘗て「如來の光明と云つたつて何處にも無いぢやないか」と云つて物笑ひを招いた事があつたが、如來の光明は太陽の光や電燈の光のやうな光とは違ふのである。謂ゆる「超日月」の光である。また太陽の光だつて塵埃があるからこそ私達の眼にも見えるのである。若し地球上から塵埃を取り去つてしまつたら何も見えな」と云ふ話だが、假に見えないからと云つて我々の太陽に光線は無いと斷言し得る人は一人もない筈である。それも「有礙光」だからこそ塵埃にぶつつきあつて互に反射しつゝ私達の感覺に訴へて居て呉れるのである。

況して如來の光明は「無礙光」なのである。いくら「無邊光」であつても、通常の感覺に入つて來ないのは當り前である。それを見得るにはまた別な感覺が必要であることは云ふまでもない。即ち別の感覺とは「信仰の眼」のことである。

信仰の眼からすれば「清淨光」として拜まれ「歡喜光」として拜まれ「智慧光」として拜まれ「不斷光」として「拜まれ「炎王光」として拜まれて來る。

即ち「清淨光」としては、私達の心を清くして下さるのであり「歡喜光」としては、私達を法喜法悅の中に感情を豊富ならしめて下さるのであり、また「智慧光」は無智な私達の眼を明かにし、段々天地の道理に氣付かして下さるのであり、常恒不斷に私達を照らして居る「不斷光」は、私達をして常に「如來照鑑の下に在り」との感覺を持續せしめ、次ぎから次ぎへとシクジリばかりして居る私達を因循姑息な消極的な氣持に追ひ込まず炎王光の強い力を以て、私達の滅罪生善を促がして居て下さるのである。

そして信仰が深まれば深まる程「無礙光」としての如來様の絶對さが益々判り「無礙光」として如來を讃歎する感情が愈々湧き上り「難思光」としての絶對信仰の氣持がいやが上にも強まつて來る。この十一光はホンの一部分を表現したものに限りないけれども、ただだけを眺めて見ても實に如來の光明の「無量光」でましますことがわかるのである。

また佛の光明には常光と神通光（又は現起光）との二通りの光明があるとして居る。常光とは人格である。人格の光である。別に心を用ゐずして周圍に雰圍氣をかもし出すところの人格の力である。また神通光（現起光）は特に心を用ゐる心を働かして發すところ

の光明である。謂はゞ精神力とでも云ふべきものである。

釋迦牟尼佛の常光は一丈六尺を照らし現起光は一萬八千世界を照らすと云はれて居る。然るに阿彌陀佛の光明は常光も現起光も共に十方世界を照らしして區別するところはない。其威神光明は諸佛の及ぶ能はざる處であり誠に最尊第一である」と大無量壽經には更に委しく「八萬四千の相好の一つ一つに各八萬四千の隨形好があり其一つ一つの隨形好から各八萬四千の光明が放たれ其一つ一つの光明が遍く十方世界を照らしつゝ、しかも念佛して居る衆生を攝取して居て下さる」と説かれて居る。して見ると現に念佛して居る私達は五百九十二萬七千四十億萬と云ふ淨山な光につゝまれて居る譯で、それも無意識でなく意識的に攝取護念されて居るのである。謂ひ換れば全宇宙を包含する光明を以て包まれはぐくまれ養はれ攝められて居るのである。こんな嬉しい事が外にあるであらうか。是れ以上の大きな幸ひが外にあるであらうか。唯だ思ふだに嬉しいさの限りである。

大きさに於てはとても比較にはならぬ事ではあるが、せめて地上にその類を求むれば、如來の慈光は母親の慈愛にも似て居るやうである。私達が如來を求むるのは宛かも乳呑み兒が母を求むるが如きものである。私達が如來を戀ふて御名を呼ぶのは恰度赤子が母の乳房を求めて母を呼ぶ如き心境でもあらうか。

母を求めてなき叫ぶ聲。是は正しく求道時代の私達の念佛の聲に

似て居る。

また母の乳房にすがりついて絶對安心して居る赤ん坊の姿。それは正しく念佛の中に如來の慈光を感じ如來の慈光の中に包まれて居ると信じ切つて居る私達の姿に似て居る。

私達は泣いても笑つても如來様の光明の中に抱きかゝへられて居るのである。

だから私達のなす事は怒つても悲しんでも畢竟は如來光明裡中の毘盧藏でしかない。

然しそれだからと云つて何時迄も何時までも赤ん坊のやうな氣持で居てよいと云ふ筈はない。

親の慈悲は決して子供の無邪氣な戯れを何時までもほゞ笑ましく見て居るものでないからである。

「遣へば立て、立てば歩めの親心」

と云ふ言葉もあるやうに、一日も早く成人し一日も早く自分と同じやうに大人になつて貰ひたいに相違ないのである。

親の子に對する念願としては何時までも「甘つたれ」で居られては困るのである。如來の慈悲もまたさうでなくてはならぬ。光明の中に攝取不捨して居る所以のものは、衆生をして一日も早く宇宙の大法に隨順し、一日も早く同體の覺位に到らしめ、一日も早く佛作佛行の人たらしめんと望んで居られるからこそではなからうか。それがまた本願力の目指すところでもあり、如來の中に合一せしめん

きくづされる。誠に悲しいことである。だから少くとも「不退轉位」にまで信仰を進めなくては駄目である。

然かも其「不退」と云ふことは單に退かないと云ふだけの意味ではなく、無限に伸びて行く事を云つて居るのである。何年過ぎてても赤ン坊状態を退かないと云ふのでは本當の「不退轉」ではないからである。段々信心が如來様に育てられて行くところに本當の「不退」があるのである。況して「一生補處」即ち如來様の相續者にまで進まなくてはならぬのであるから、單に「我信仰を得たり」として呑氣に構へて居てよい筈はない。往相としての「願往生心」と共に還相としての幾分かの「願度衆生心」が無くては折角如來様の慈光にはぐままれ育てられて居る甲斐がないと云ふものである。

だから常に此の「光明遍照」の文を稱へては如來の慈光を喜び、如來の慈恩に報ずべく如來の御名を呼んで段々自分の信仰の増進を冀はなくてはならない。其處に信仰も進歩して不退となり、如來の本願に契ふ如來の愛兒ともなり得るのである。

噫。如來よ。我に正受を玉へ。

と叫ばずには居れないではないか。

(字解)

光明——自ら光るのを「光」と云ひ、物を照らすのを「明」と云

ふ。光は本體であり明は其働きである。又た光即明の意味にも用ゐられることもある。また如來の光明には常光

神通光、色光、心光、色光、智慧光、外光、内光、身光、智光、光明法光明、依身光明などの區別がある。其内常光、色光、外光、身光等は同じであり、神通光、心光、智光、内光等は同じものである。また佛の光明は色々の作用をする。例へば觀無量壽經には「一一の光八萬四千の異種の金色をなし一一の金色は其の寶土に偏じ處々に變化して各々異相をなす。或は金剛臺となり或は眞珠網となり或は雜華雲となり十方面に於て意に隨つて變現して佛事を施作す」とか、また大經には「この光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦の處に於て此光明を見れば皆な休息を得てまた苦惱なく壽終の後皆な解脫を蒙る」など説かれて居るのがそれである。

また佛の光明中、全身より發するを舉身光、白毫相より發するを白毫光又は眉間光、頂邊より發するを圓光又は頭光、後背より發するを後光などと云つて居る。また光明には光輪、光雲、光澤、光啓、光照、光力、光曜、光焰とか云ふやうな色々な名があり、慈光、悲光、神光、威光、大光、金光、無碍光、不可思議等の名もある。

また魔光と佛光との相違については、魔光は人の心をさはがし又は恍惚とならしめ、佛光は人の心をして澄淨清淨ならしめると云つて區別して居る。

編輯後記

◆暑さも本格的になりました。

事務所の隣りのプールは大繁盛です。泳げるやうな海へ行くには相乗乗物に乗らなければならぬ都會の子供達はプールのなま暖い水たまりで酷暑を凌ぎ身體をきたへてゐます。

◆編輯子も泳ぎ度いのですが、

あんまりきれいでないあの水を見るとつい二の足を踏みます。大海のきれいな水で毎日泳げる子供らはこう云ふ時には甚だ幸せだと思ひます。海とプールでは氣持の上にも與へるところのものも相當違つて來るでせう。

◆浮土宗から大陸戰跡巡禮に行

かれた方々が歸つて來られたので、その方々の全部に土産話を書

いて頂く筈でしたが、色々な御都合で本誌には江藤滋英、木村玄俊の兩師、並びに牧少將と行を共にされ中支戰跡を回向して回られた大村桂藏師が御執筆下さいました。佛教徒の大陸視察談はまた本誌獨特の讀物となりませう。

◆吉田絃二郎氏は本誌より數回に涉つて坂根彌兵衛翁のことを書いて下さることになりました。

氏の靈筆によつて、この妙好人の眞面目が躍如としておどり出すことでありませう。これこそ生ける信仰の糧であります。

◆從軍僧の中野隆雄師の戰線よりの通信も簡單ではありますが、讀者の胸に迫るものがあります。

◆その他小説、實話などにも例月とは幾分異つた新鮮味を盛つてあると信じます。(道)

◆本會出版物の御註文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

◆會員で御住所御變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年七月二十日印刷納本
昭和四年八月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町二ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價金十二錢

(送料五厘)

會費金一圓二十錢

一ケ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷中)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ポ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳隨園著

(增刷中)

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回二日發行)
昭和十四年七月廿日印刷納本 昭和十四年八月一日發行

淨

土 第五卷 第八號

定價金十二錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣 金十三錢
外地定價